



THE · STORY
OF · JOSEPH

J · R
MILLER · D · D

325
414



始





リ

著者 ジェ・アール・ミラー
伊藤宗輔 譯



基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及弘布にあり、本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる此書に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

■原著の序

聖書を読むには種々の讀方がある。が最も有益な讀方の一つは、神を喜ばすにはどう云ふ生活をすればよいか、又此上もなく美しい品性を得て、此世界に最大な祝福を残すには、如何なる生活を營めばよいかと云ふ事を、聖書から學び得る様に讀むことである。

ヨセフの傳記は澤山あるが、或ものは、古代のエヂプト及びエヂプト人に關する知識を、其に依りて得ることが出来るので、大變貴重なものである。然し本書では其の方面の事は少しも書かない、著者の望みは、只讀者諸君の爲めに此物語の内に含まれて居る、人生に於ける教訓を見出し、これを解釋すれば足るのである。

■譯者の序

私がこの本を買つたのは、四年程前の事であるが、それから後、私は幾度この本を読んだか知れない。そして読む度に、いつも私は新しい教訓と力を本書から受けたのである。

ミラー博士は米國基督教界に名聲噴々たる人、其著書には實際的信仰的のもの多く、世既に定評がある。本書の如きも、たゞ書名と目次とを見たゞけでは、到底豫想されぬ程の深き内容と教訓とを含んで居る。實を申すと、私も初めは、たゞ有觸れた「ヨセフ物語」とのみ思つて、読み始めたのであるが、それが何時しか、譯して世に紹介したいと思ふ程に、引きつけられて了つたのである。

私は青年も老人も男も女も、基督教信者も又信者でない方も、どうか本書を一度読んで頂きたいと思ふ。私は諸君が必ず多くの教訓を、本書の中から學ば

れる事を堅く信じて疑はない。

私は出来るだけ忠實に譯したつもりであるけれども、それでも誤譯が無いとは限らない。然しあつても原著者の云はんと欲して居る核心は確かに傳へ得たことゝ思つて居る。

猶本書をお讀みになる前に先づ舊約聖書の創世記第卅七章から第五十章まで一ト通り讀んで頂きたい事を申添へて置く、でないと言書中の話が解り難い方もあるかも知れぬと思ふからである。

譯者

大正五年四月

目次

ヨセフと夢	一
奴隸又牢獄の人ヨセフ	三二
牢獄より宮殿へ	六一
神の爲めの解釋者	九〇
ヨセフと彼の兄弟	一一八
ヨセフと彼の父	一四八
ヨセフの老年時代と死	一七七

穿
よ
り



セフと夢

彼等互にいひけるは視よ作夢者來る

— 創世記第三十七章第十九節 —

人の一生は全く計り知り難い
彼の智も亦頼むに足らぬ
人間は小石や岩の話なら

又蝶や蟲の話なら、書く事も出来よう
 然し彼自身の長い生涯の事や
 其生涯の榮枯盛衰の歴史は
 書く事は出来ない
 ほんの短い一生の中にも
 嵐あり荒浪あり
 變遷、失敗、成功が含まれて居る
 日々端しなく變つて行く。

—ボーナー—

神様のなさる事の話が始まると、其終りがどうなるか私共には決して解らない。こゝに一人の少年が 籃を手にし野をよこぎつて行きつゝある。これが今から七章に亙つてお話ししようとする物語の發端である。

神はイスラエルの民を數百年の間エジプトに住まはせようとなさつた。一體これは何うした譯であるか。カナンの地はイスラエルの民の住む土地として彼等に約束せられた所ではなかつたか？それなれば何故其所に彼等を止めて置かれなかつたのであらう？これには種々理由がある。

カナンの地には、其の頃到的處に、戦争好きの種族が住んでゐた。彼等はイスラエル人の數が、極く僅少な間こそ黙つても居れ、それが日増しに増し加はつて、今にも一大種族とならうとするに至つたならば、屹度戦争を仕掛けて來て、イスラエル人は爲めに滅亡の悲運に陥ることとなるであらう。そこで神は一旦イスラエルの民を、安全に住む事の出来る地に連れ行きて、彼等が其處で一の國民となり、カナンの蠻族と戦つても勝てるやうになるのを待つて、然る後に連れ歸らうと企て給うた。

未だ他に彼等がカナンの地を去る様になつた理由がある。彼等は世から離れ

て成長せねばならなかつた、彼等は神の民となり、神の律法と教を受け容るべきものであつた、教師も詩人も豫言者も、やがては此世の贖主、救主までも、彼等の中より産れ出ねばならない筈であつた、彼等は純潔な血を有つた神聖な民であらねばならぬ。併し此はカナン人と一所に成長するならば出来ないことであつた、カナン人等の血が、イスラエル人の中に混る恐れがある、彼等は異種族と結婚し又交際する憂のない所に連れて行かれる必要があつた。そこで神は彼等を、排外的で自負的で、少しも外國人と交際しないエジプト人の住むゴセンと云ふ所に移住させ給うた。これは彼等をして、國王の親切な保護の下に、完全に育み、全く他の人民から離れて、單獨に成長せしめんがためであつた。

また外にも彼等が一時カナンの地から他へ移された理由がある。カナンは學問もなく教育もなく、美術も科學も知らない、粗暴で野蠻な人民の住んで居た

國であつた。是に反してエジプトは、當時世界で最高文明の發源地と見做されてゐた土地である、大きな圖書館もあり、大學校もあり、美術も文學も教育も非常に發達して居た國であつたから、イスラエルの民が若しエジプトに住むやうになるならば、彼等は大に教育せられ、訓練せられ、やがて世界の民を教ふる位置に立ち、神から與へられた律法を守護者となり、獨立して國を治むるに必要な技術を學び得るに違ひない。ヘブライ人が世界に如何なる功績を爲したか、殊に彼等の律法と宗教とを通じてどれ程の益をなしたかと云ふ事は殆んど測り知るとの出来ない程である。併し若し此の民がカナンで成長したならば、決して斯くの如き感化を世に残す事は出来なかつたであらう。

神様はそこでヤコブの一族をカナンからエジプトに移さうとなさつた。今しも籃を手にして、野を横ぎり来るヨセフは、正しく此大計畫の最も大切な役をしようとして居るのである。

併し彼は少しも其に氣付いてゐなかつた、多くの場合、吾々は自分が今神の大切な御用を務めつゝあると云ふ事に心付かないものである。ヨセフは使にやられた。彼は十七歳の快活な、美しい、無邪氣な子であつた。お母さんは死んで最早居ない。只一人同腹の兄弟でベニヤミンと云ふ四つか五つ位の弟があつた、其他に十人の異腹の兄弟もあつたが、此兄弟とは餘り仲よくなかつた。

仲のよくない一つの理由は、彼が父のお氣に入りであつたからであつた。實際ヨセフは他の兄弟より出來の良い子であつた、且つヤコブが最も愛して居たラケルの子供であつた。ヤコブは自分の子供の中でヨセフを一番可愛がつて居たが、彼はそれを隠すどころか、ヨセフは自分の一番可愛い子であると云ふことを、みんなに廣告するやうな、美しい衣を作つてやつたりして、ヨセフに對する特別な愛を表はすことに苦心してゐた。

家庭内の偏愛と云ふ事は最も愚な遣方で、又悪いことである。勿論快活なところのない、陰鬱な子供、強く丈夫でない、即ち弱い病身な子は大に褒めてもやり又勵ましてやらなければならぬ、助けてもやり、可愛がつてもやる必要がある。然し偏愛は小供を生意氣にし自負心を増長させて害を及ぼす場合が多い、嬌養れたり、好き放題にさせられたりして蝶よ花よと育てられた子に、良い子と云ふのは少ない。人に差別を作つて、これを愛しかれを惡むと云ふ事は他の人に對しても善からぬ事である。且つ偏愛は他の人をして其愛する所の人を嫌はせ、憎ませ、嫉ませるものである。

或る朝早く、母の寢室の戸を力なげにコツ／＼と敲く音がした。母は室のうちから『誰？いゝ子かい？』と尋ねた、すると悲し相な聲で『いゝえ、違ふの、いゝ子ぢやないの、私です、私……』と答へるものがあつた、母は其悲し相な聲を聞いて大に悟る所があつた。それから云ふものは、其家に『いゝ子』

と特別の名のついた子供は居なくなつたと云ふ事である。何處の家にも『秘藏子』と云ふものはあつてはならない。

『視よ作夢者來る』ヨセフは嘗て或る夢を見た。それは彼の兄弟等の禾束がヨセフの禾束を拜したと云ふ夢で、も一ツは日と月と十一の星が彼に服従したと云ふ夢であつた。彼は小供心の、何の考もなく此事を兄弟達に話すと、此れを聞いた兄弟達は怒るまい事か大層立腹した。然しこの夢はヨセフの將來に就ての神のお告げであつた。歲月が過つにつれて、段々其が實際の事となつて來た。

こゝで私共が先づ氣をつけて讀みたいのは、ヨセフが其見た夢を兄弟達に話した事が、一層彼の憎しみを受くる原因となつたと云ふ事である。ヨセフが他の兄弟よりもよく出来る子で、將來も他の子より偉くなると云ふ一寸した暗示でも、兄弟の嫉みを一層深くしたと云ふ事である。

此兄弟等は六十哩程離れた所で羊を牧つて居た。年老いた父のイヌラエルは

自分の息子共が如何暮して居るか氣になつたので、籃の中に種々な善い物を入れ、ヨセフに傳言を依頼んで使にやつた、そして其返事を持つて歸るのを待つて居た。十六七の少年に取つては此旅は實に長い淋しい旅であつた。然し漸くヨセフは彼の兄弟の居る所近くまで來た。

兄弟等はズツと遙の彼方よりヨセフの來るのを見てゐた。ヨセフは例の立派な衣を着て居たから、兄弟等には直ぐそれがヨセフだと云ふ事が解つた。そして『視よ作夢者來る、去來彼を殺して筭に投げ、或悪しき獸これを食ひたりと言はん』と互に話し合つた。

こゝで私共は一寸話を止めて、私共の心に一時たりとも人を嫉むと云ふ念を持つ事が、どれ程恐ろしい悪事であるかに就て考へて見なければならぬ。嫉む心がだん／＼ひどくなる人を殺す様になる、自分の兄弟をも殺すやうになる。聖パウロは『怒りて日の入るまでに至ると勿れ』と教へたが、これは如何

にも賢い訓である。私共は少しでも嫉み心が起つたならば、直ぐそれを破らなければならぬ。神の御前に跪いて夕の祈を捧ぐる時は、其の日吾々の心に浮んだ悪念邪想の總て洗ひ去られて、元の清い心になり返る時でなければならぬ、其時は凡て他の人に對しての悪感情を、自分の心から棄て去るべき時である、其時は自分の受けた不正、不親切、不利凡てを忘れ去るべき時である。

人を憎むには人生は餘りに短か過ぎる

我々此地上にはほんの短い間しか

生きて居られない

過ぎ去つた年を振り返つて考へて見る時に

云ひ様のない程、人生は短い。

人を憎むには人生は餘りに短か過ぎる

青々とした樹も直きに果を結んで
墓の上で平氣の平左で揺れる。

ヨセフは殺されなかつた、彼の使命は尙終らなかつた、悲劇が始まらうとする時に神の御手が働いた。兄弟の一人のルベンと云ふ子は、皆がヨセフを殺さうと云ふのに反對し、殺すのは悪い、罪に投げ入れようと云ひ出した。而してヨセフが若し罪に入れられたならば、自分が後から行つて彼を助け出してやらうと思つた。終に皆はルベンの云ふ事を容れて、彼を捕へ罪に投入して置いて平常の食事をしに行つた。「彼等坐りてパンを食へり」

然しこの震へて泣いて居る、小供をちやんと見て居る眼が天にあつた。暗い濕つた罪の中で泣き叫んで居る聲を聞いてゐる耳が天にあつた。其とは知らず此無情な兄弟達は、大嫌ひのヨセフを亡き者にする事が出来たと云ふので、

其手柄を語り合ひ、會心の笑みを漏らしながら食事をして居ると、遙か彼方にエヂプトに下つて行く一群の隊商が来るのが見えた。ユダと云ふ兄弟はこれを見てハタと思ひ當り、ヨセフを此商人に賣つて了はうでは無いかと云ひ出した。さうすれば二つの得がある、第一にヨセフを殺したと云ふ疑が掛らない——人を殺した血はいつまでも手に附いて居て面倒なものである、其血は洗つても洗つても附いて居る、第二にヨセフを賣れば金になる。そこでヨセフは寮から引上げられて、此隊商に銀二十枚で賣られて了つた。

隊商はまだ遠い所に神の使をして行くヨセフを乗せて出發した。兄弟達ははまだ濟まない食事をしに又元の所へ行つたが、一方ヨセフを助けてやらうと思つて兄弟達から離れ、其機を窺つて居たルベンは、寮に行つて視るとヨセフが居ない、さてはいよいよ殺されたのかと思つて自分の衣を裂いて泣き悲んだ。他の兄弟達は家の年老いた父に何とか云てやらなければならぬので、山羊の

羔を殺してヨセフの衣に其血をぬり附けて父に送り、何事も知らぬ様子をして「私共はこんな衣を野で拾ひました、ヨセフの衣の様であるが、父さんは何うお考へなさります」と云ひ送つた。父ヤコブは、この残忍な兄弟達の云つた眞紅な嘘にすつかり偽されて「ヨセフは獸に食ひ殺されたに違ひない」と云つて嘆いた。廿年以上も彼は、さうとばかり思つて泣き悲んで日を送つた。

お話の續きをこゝで暫く止めて、遠くヨセフが奴隸に賣られて行くのを思ひながら、二三の教訓を學びたいと思ふ。

(1) 朝、門口で「行つてまゐります」と挨拶をする時、私共はそれは只ほんの數時間の別れだと思つて居るけれども、其別れがどんな永い別れになるやら私共を知る事は出来ない。ヨセフは其朝一寸した使をするために、二三日の旅をする考で父の家を出た。我等は其時の光景を想ひ浮べる事が出来る。家内の人はこの小供の旅に就て非常な興味を持つて居た、誰も皆旅に在る兄弟達に傳

言を頼んだ、祖父のイサクもまだ生きて居た——大變年は取つて居たが——そして傳言も頼んだらうし又祝福の言葉も云ひ送つたであらう、小さいベニヤミンも大きい兄さんの旅をする事を一層面白く思つたであらう、而して一所に行きたがつた事であらう、家内の者が皆門の戸口に集つてヨセフの出て行くのを見送つて、姿が見えなくなるまで『さようなら、さようなら』と云つたであらう、そして誰一人として不安に思つて居たものはあるまい、二三日の内にヨセフは又歸つて來ると思つて居たであらう、廿年以上もあの喜し相な可愛い顔を見る事が出來ない、或者は再び地上で相見する事が出來ないなどは、夢にも思つて居なかつたに相違ない。

こゝに見逃してはならない教訓がある。私共の一寸した別が數年間、又は永久の別となるかも知れない。朝立關で別れる時に——或者は會社に勤め、或者は學校に行き、或者は數日の旅行に、或者は家に殘る。けれども何時その皆が一

所に集つて、お互に顔を見合す事が出來るか解らないのである。お晝には食卓を圍んで一所に食事をしよう、夜は爐邊で一所にお話をしようと思つて居る。

——然し其時に確に會へると云へようか？ 朝出て行つたきり、夜分になつても其儘、一生歸つて來ない人が澤山ある。

若し其朝ヤコブやヨセフ、又其家族の人々が、廿年以上も再び會ふ事が出來ないぞ知つて居たならば、その別れは深い愛情の一層こもつた別れであつたではあるまいか？ 然も人生の轉變はこのヨセフの一家の如く私共にも又私共の一家にもいつ來るか計り知り難いのである。『さよなら』と短く云つた此一言で、數年間或は永久に別れなければならぬかも知れない。此事を思ふ時に私共は別れる時は常に愛の心をたへて別れたいと思ふ。私共は決して腹を立てたまへ、又人を悪く思つたり、喧嘩をしたり、口論をしたりしてぶり／＼怒つたまへで別れてはならない。私共は『さよなら』と云ふ別れの言葉を冷淡に、粗略

に云つてはならない、常に愛に満ちた心と濃厚な感情とを以て云ふべきである。假りに外に出た人が死人になつて家に連れて來られたとする、或は外に出て居た間に家に残されて居た者が死んだとする——所で若し其別れる時に荒い言葉で叱つたとか、苦い顔をしたとか、腹を立て、別れたとかしたならば、其生き残されたものが、花で飾られた棺の前に立つて、其人と別れる時の最後の言葉や有様を思ひ出した時の悲しみは何うであらう！其時は最早如何程美しい花を以て棺を飾つても、門口で冷淡に別れた罪を償ふ事は出来ない、又別れた時の悪感情を拭ひ去る事は出来ないのである。私共は家庭の人と別れる時は、それが又どんな短い別れであつても、その言葉が最後の言葉になつてもよい様に、又さうであるかも知れないから、充分快い、充分情のこもつた別であり『さようなら』であらせ度いと思ふ。

友達に『さよなら』を云ふ時には
 其が假令一夜の別れであらうとも——
 友の手を自分の手にしつかり握れ、
 明日にならぬ内に運命の手が
 自分達にどう働くか、
 誰にも解らないのではないか？
 人は別れる運命を持つて居る、
 お互が又會つて喜ぶ前に
 日が月となり、月が歳になつて行く、
 何と云つても別れる事はつらく
 涙が出て、頭の下るものだ、
 遠く行かない内に
 お互に長い間別れない内に、
 お互に死なない内に、だから

行き去る人の手をしつかり握らう、
眼に見えず、運命が

其人と共に附纏つて行くのだから。

つまらない話をする間に、

真面目な話を常にする様に心懸けぬと、

これから先、夜も晝も

悔恨があなたを一所に歩く様になる。

(2) 私共は朝出かける時には其夜の來ぬ間に何んな不幸や災難が自分の身に
振りかゝつて來るか決して知る事が出來ない、ヘブロンの家を辭してシケムに
行きかけて居るヨセフを見よ、彼は少しも危険の心配などはして居なかつた、清
い心を以て全てを神に任せて少しも恐るゝ所なく旅をした、彼は兄弟達の許に
行けば屹度皆が喜び迎へて呉れるであらうと豫期して居つた、——あの様な目

に遇はうとは露程も思つて居なかつたに違ひない、二三日宿つたら又自分を可
愛がつて呉れる父の家に歸らうと思つて居つた、然も彼は此の先どんな運命に
向つて進んで行つたか!

私共は常に自分達の一足先には何んな物が横はつて居るか知らないで生活し
て居る、明日は泣かなければならぬ運命が迫つて居ると云ふ事は少しも知らな
いで今日を笑つて過して居る、一足先に大きな弊があるかも知れぬ其危険に
は一向お構なしで花園を歩いて居る、明日は病氣で仆れなければならぬかも知
知れぬと云ふ事は少しも考へないで、體が丈夫だ、力が強いと云つて自慢して
居る、何時どんな不幸があつて貧乏になるかも知れないのに、己は金持だと思
張り散らす、私共は大喜びで旅に出る、而も道中どんな事が起るかも知れな
い、或は死ぬ様な目に遭ふかも知れぬと云ふ事に就ては少しも氣を付けない。
さて、是より何を學び得るか、人事計り難しとして私共は悲しみ憂うべきであ

らうか？ 毎日々々、明日は悲しみが来るかも知れぬ、病氣になるかも知れないと云つて、恐れ慄いて居なければならぬであらうか？ 否、さうではない、教訓はそんな所にあるのではない、其の様な考は私共の喜びも勇氣も凡て奪ひ去るであらう、然し神様は太陽の輝いで居る間は私共が不愉快で居る事を求め給はない、何故なれば其太陽も懸て雲間に隠れなければならぬ時が来るからである、神様は明日を心配する事に依つて今日の晴れた心持ちを曇らせる事を願ひ給はない、神様は老年になつてからの事を苦に病んで、青年の喜ばしい時代を悲しく過せとは願ひ給はない、神は假令明日は不幸が来ようと、今日は今日の恵みを楽しんで、其日のなすべき業を勵んで生活する事を求め給ふのである、『一日の苦勞は一日にて足れり』。

然るに希望に満ちた未來にも、どんな失望すべき出来事が横はつて居るか知れぬと云ふ事を私共が承知して居つて、如何して一日一日を樂み得ようぞと聞

く人がある。私は答へて云ふ、それは靜かな心を以つて凡てを神に任せまつる信仰に依つて、又神の御心のまゝに全く服従する事に依つてのみ爲し得ることである。私共は時々未來の事が解ればよい、自分達の方針も定らうし、へまな失敗もしないで濟むから、未來の事をすつかり知り度いとよく思ふ事がある。然しヨセフがドタンに行く途中で兄弟等が自分を何んな目に遭はすか、そして自分は終に奴隸に賣られなければならないと云ふ事を、人から聞かされて知つて居つたとして見ると、其結果は如何なつたであらう。ヨセフは其旅を續け得たであらうか？ 途中から引返さなかつたであらうか？ さうなると神様の奇しき攝理のお話は駄目になつて了うであらう。そしてヨセフ自身も随分酷い目に遭はされた始めの不正残酷の、其後に來るべき未來の幸福を享受する事は出来なかつたであらう。これに依つて、國民が何程の損をしたか、世界が何程の損をしたかを考へ見よ。

未來を知り通すと云ふ事は私共にとつてよい事ではないのである。と云ふのは、私共はよく神様の御考にまで差出がましい事をして、自分自身の未來のみか、他人の上までも害ふやうな事をして、折角の神様の御計を駄目にして丁うからである。又、今日は憊う云ふ事があつたから、明日は憊う云ふ事があらうなど、つまらない事を考へて、恐れたり心配し過ぎたりする事も悪い事である。而も此不安のあるが故に、私共は常にキリストの御側近くに居るのである、居らざるを得ぬのである。神が私共を導いて下さるならば、そして私共が其御導きのまゝに従つて行くなれば、何事も私共にとつて善からざるはない。よし神が私共に不幸を來し苦痛を與へ苦しみを下さつても、其はやがて眞の恵と幸福とを與へ給ふ前提である。

(3)次に不人情と云ふ事に就て學ぶ可き事がある。ヨセフの兄弟達は彼を罪になげ込んで後に平氣の平左で食事をした、彼等が美味しい食事をして居る直ぐ

側に彼等の弟が云ふ事の出来ない程な悲しい目に遭つて居るのに。彼等はヨセフを罪に入れて何も與へないで餓死させようとしたのである、これは残酷な程度に於て彼を直ちに斬殺すのと少しも變りはない。

これに依つて私共は「嫉み」と云ふ事が、如何に人の心の中にある 温い愛情を、石の如く冷かならしめるものであるかを學ぶことが出来る。彼等は其兄弟が側で苦んでゐても、耳にヨセフの悲しい叫び聲が聞えても、一向平氣で、自分達の快樂をのみ追ひ求めて居つた。周圍の光景に注意して見れば、たつた二三日前に楽しい家を出て來た少年が今は暗い罪になげ込まれて居る、如何しても出る事が出来ない、足は泥濘にすん／＼陥る、體の周圍には名も知らぬ蟲が這ひずり廻つて居る、只もう死を待つより外はない。

この様な運命に今日多くの青年が遭ひつゝ、ありはしないだらうか？ 到る處このやうな罪がある、周圍の人が皆其罪に青年を投げ込まうとして居る——而も

其葬の底は陰府である。故に一層深い——この葬の中に幾千幾萬の青年男女が投げ込まれて居るのだ。

兄弟等はヨセフをこの葬に投げ込んだ、世の中には自分の兄弟をこの暗い葬に何時も投げ込んで居る人がある。我等は兄弟の守者ではないか。然り、然るに神の姿をそなへ、他人の靈を護るべき人が、何人かを罪に落さずしては居られないとは一體何うした譯であるか。人の良心を麻痺させ、人の靈を汚す罪は恐るべきものである。他の人の潔い唇に酒杯をあてがひ、其汚れなき耳に不淨不潔な言葉を囁く罪は猶更惡い事である。然も世には人を惡事に誘ひ、青年少年を恐るべき葬に陥れる兄弟達が多くある。

飲食店は凡て此葬である、ヨセフの落されたそれより、幾層倍も暗く恐ろしい葬である。前途望み多き青年、田舎から出て来た人々、此等の人々の幾千人か、この葬に陥れられた事であらう、そして出る時には彼等は決して入つた時

と同じ様をしては居ないのである。博奕の巢窟もこの様な葬である、其所では名譽も眞理も人格もなくなつて了ひ、不朽の靈も消え失せて了う。怪し氣な婦人の居る家もこの葬である、「彼女の足は死に至り彼女の家は陰府に至る道」である、自分の靈を愛する人、平和を求め名譽を重んじ、純潔を願ひ、生活を愛する人は、かゝる家に一步も足を踏込んでならぬ。此等の葬の中に落ち込んだ人々は只全能の神の強き御手に依てのみ救はれる事が出来る。

未だ此話が終つたのではない。ヨセフの兄弟達は自分の弟のヨセフが葬に落ち込んで居るのに御馳走を食べて居た、これを見て「何と云ふ殘酷、何と云ふ不人情な事であらう！」と或人は云ふ。然し私共の生活にこんな不人情な事をしては居ないだらうか？ 社會は貧弱、苦惱、必要に満ちて居る、何處に行つても私共は苦しみと悲しみを發見する、此處に病人がある、彼處に死人がある、此家は貧乏だ——小さな兒が餓ゑて泣き叫んで居る、次の家は酒を呑む、

悪い事をする、罪を犯す、神のめぐみを忘れて、反対に神の悪口を云ふ。

凡ての方面に罪の淵に陥つて其闇のなかに滅び行く兄弟姉妹がある、私共の住居の近くにお祈りをする事を知らない家庭がある——それは食ふ物のない家庭よりも悪い。私共の町に陰府の陥穽に誘ひ込まれた少年がある、然も誰一人それを救はうとしない。ドタンで罪に投げ込まれた、この清い伶俐な氣高い所のある少年の、人の心を傷ましむる悲しき光景も、天の御使の目には何も珍らしいものではなかつた、天の御使は到る處にこの様な有様を見るのである。

自分達は今何をして居るか？ この無情な兄弟達のそれよりも劣つて不人情な事を爲つゝありはすまいか？ 窓から聞えて来る空腹を訴へる叫びには少しも耳を貸さないで、自分の好きなものを食卓で食べては居ないか？ 『ヨセフの兄弟等は何と云ふ不人情な奴だらう』と云ふ人がある、然り、併し多くの基督者の慈愛心はこれより勝つて居ようか？ 見よ、毎日美味しいもの許り食べて巨

萬の富があり、榮耀榮華な生活をして居る家の裏口には乞食がおめぐみを強請つて居る！ 凍る様な戸外には乞食の小供が目覚める程な美しい玄關を覗いて震へて居る！ 而して何處に哀憐の心を有つた人があるか？

多くの靈が亡びつゝある、多くの青年が陰府の穽に落ちんとして居る、多くの年若き婦人が賤しい事に厭ふ可き事に誘惑されつゝある、多くの少年が恥づべき所に引き込まれつゝある。

教會は何をして居るぞ？ 多數の信者は何をして居るのだ？ 私共はこれ等の亡びつゝある者を救ふために勉めつゝあると云へようか？ 私共の心にはキリストを宿して居る、そして私共はキリストの愛と恵みとをたへつゝある。教會の聖餐式にも列し天の糧に飽き、共に讚美の歌をうたひ、信者の愛を以てお互に握手もする。併し其所に坐して居る私共の耳に戸の外で亡び行きつゝある靈の叫びが嘗て一度も響かなかつたであらうか？ イエスの美しい御顔を喜び

の心を以て拜する時に、危難と悲しみに沈んで居る兄弟姉妹の有様が私共の眼をかすめ去りはしないだらうか？ 人がやれ危い一寸君の力を貸して呉れと云ふ時には誰でも早速力添へをしてやる、キリスト信者もよく貧乏人には恵んでもやる、然し社會にはもつと悲痛な、もつと深刻な要求がある。罪の淵に落ち込んで誰一人救うて呉れる人もなく、亡び行く人が澤山あるのだ、これ等の人々を救ふ心が私共に無いであらうか？ 私共の身邊には憐れうした人が澤山居る—— 葬に落ちた人々、兄の爲に陥れられて葬の中にある弟、そして誰一人として彼等の叫びを聞いてやる人もない——こんな人々が澤山ある。若し犬でも牛でも又は馬でも穴に落ち込んで居るのを見たら、私共は大急ぎで助け出してやる。それなのに、自分達の兄弟が葬に落ちて居るのを見て之を救はうともせず、手一つ伸ばさないうで知らぬ顔をして通り過ぎてよいであらうか？ 或人が憐れな話をした。ニュー・イングランドの或る町を、いつも悲しみ憂

へて喪心して居るかの様に頭を下げて歩いて居る男があつた。此人は曾て大西洋通ひの汽船の船長であつたが、或時の事、彼の船が波を蹴つて走つて居ると、遙か彼方に難船の信號をして居るものが見えた。早速双眼鏡を取つて其方を見ると、難破船の木片に一人の男が縋つて漂つて居るのが見える。彼を救助に行くには船を停めて引返さなければならぬ、すると時間が大變遅れるので船長は『いや、何處かの船があの人を助けてやるであらう』と云つて其儘船を進めて定規の時間に港に入つた。人々は航海の早かつた事を非常に賞讃して大喜びをして居たが、船長はあの浪荒い海で見た信號や又双眼鏡に映つた其光景、難破船の木片に依り縋りながら漂つて居た人の有様、そして其を救ひもせず、其儘其所に残して来た其記憶がどうしても心から消えなかつた。夜も晝も其有様が目にちら付く、もう其れからと云ふものは此船長は決して海に行かなくなつて了つた。而して彼が町を歩く時には、人々は彼のうつむいた顔でそれが誰である

かをよく知つて居て、彼の最後の航海の恐ろしい話を思ひ出すさうである。
 今日こんにちの如く忙いそがしい世よに、私共わたくしどもがせつせと活動くわつどうして居る時ときに、人生じんせいの荒海あらかみの中なかか
 ら難船なんせんの信號しんごうをして居るのを見ないであらうか？ 人生じんせいの暴れ狂あやふさふ激浪げきろうの上うへに
 乗り出して居る靈たまの悲かなしい聲こゑ、苦くるしい叫さけびを聞かないであらうか？ として私共わたくしどもは
 其信號そのしんごうを見、其叫そのさけびを聞いて助たすけてやつて居るであらうか？ 自分じぶんの仕事しごとの手てを
 止とめて、自分じぶんの快樂くわいらくを、自分じぶんの安逸あんいつを、自分じぶんの金儲かねまけを、自分じぶんの野心やしんを振り棄すて、
 是等これらの滅ほろびつゝある人々ひとびとを救済すくひに行つて居るであらうか？ それとも 私共わたくしどもは其
 所こを急いそいで行き過すぎて、そんな事ことをする時間じかんは無ないと云いうであらうか？ —— 自
 分ぶんの兄弟きょうだいを救すくふ時間じかんがない、罪つみの淵とちから兄弟きょうだいを救すくひ出して目めに漣たぎへて居る涙なみだを
 拭ぬつてやる時間じかんがないと云いはうか？ 若もし此時このとき私共わたくしどもが手てを伸のべて助たすけてやらな
 かつたならば、不幸ふこうの叫さけび聲こゑに耳みみを傾かたむけなかつたと云いふ記憶きおくが、永久えいきうに私共わたくしどもの
 悲かなしみとなりはしないだらうか？ 滅ほろび行く人ひとを助たすけてやらなかつた其幻そのまぼろしが

常に私共わたくしどもを惱なやまはしないだらうか？
 聖書せいしょの語ことばを聞きけ、「なんぢ死地しちに曳ひかれゆく者ものを拯すくへ、滅亡ほろびによるめきゆく者ものを
 すくはざる勿なかれ、汝なんぢわれら之これを知らずといふとも、心こゝろをはかる者ものこれを曉さとらざ
 らんや、汝なんぢの靈魂たましひをまもる者ものこれを知らざらんや、彼かれはおのゝの行爲おこなひによりて
 人に報むかへべし」

山の死人が出來、野蠻なヘテ人は饑饉に乗じて其の地方の民を攻め亡し、文明は逆轉して復た舊の野蠻時代に還ることとなるであらう。エヂプトは無くなつて了ひ、ギリシヤ、ローマは野蠻の状態で残り、全世界の歴史は一變して、無数の害悪が現れて來る——先づ斯う云ふ順序に進むに違ひない。而して之は皆一人の男が自分自身の淺はかな智慧で犬を殺して、一人の少年を目前の難儀から救うた爲めで、結果は自分自身にも又世界の未來にも大變な損失を招くことゝなつたのである。

何事も神の攝理のまゝにして置いた方が好い。人間が餘計な世話を焼いた爲に、神の立派な計畫が無駄になつた場合が多いのである。ペテロはイエスを十字架にかゝせたく無いと思つた、併し彼がもし然うしたならば其結果は何うなつたであらう。愛は兎角に困難、犠牲、苦痛のために其生命を擲つ事を引き留め、斯くして神の折角の計畫を妨げ壞さうとするものである。吾々はヨセ

フが虐げられたり、奴隷に賣られたり、終には獄に投げ入れられたりするのを見るとき、ついヨセフに同情もしたくなる。併し若しさうした人情からして、其の悲しい境界の中から彼を救ひ出したとするならば、此の世の爲めに尊むべき奉仕をした、彼の光榮ある後の生涯までが、其と共になくなつたに相違ない。是を思はねばならぬ。

一體吾々の時は、凡て神の御手のうちにあるものだ云ふ觀念は基督教の信仰を確實にするものは、他に餘りないのである。ところが吾々は常にこの事を忘れて居る。そして時に吾々の目的が外れて、堪へ忍ぶことの出來ない様な困難にでも出會はずと、直ぐに吾々は亂れて了まう。併し何時かは、一番よいものを御存知なのは神であると云ふ事に氣の付く日が屹度來る。次の詩はシエムス・バツキングラム氏の書かれたものであるが、讀んで暗示を受くる所が多い。

されど汝は示し給へり、

我事のみ念ふならぬ。

人を念ふ心燃えず、

絶えし縁——知らざりせば

聖き懐み——満たされぬ望、

將、神より來る悲しみの、

涙せし事無かりせば、

我等曾つて、

我はいかに成りゆきしことならん。

成し給ひしならば、

聖旨を仰へ、わが欲求のまゝを

オ、神よ、そも幾そ度、

我與へられし運命を呪ひ、

泣き悲しめど甲斐無かりし時、

靈の窓、天に向ひて開け、

過ぎし日の汝が御むね、

うましくも又妙に、

うつり出でし事かな、

夏の夕の虹にも似て。

汝、もし、

汝の大なる賜物をひかへ、

我が求むるまゝに、

たゞ少しを興へ給ひしならば、

人みな愛に結ばれるな、
悲しみこそ愛の心生むな、
己れを棄てし我は今、
汝の内へのみ完き、
生命と愛の流の内に、
皆結ばれしを知りてけり。

我等皆汝の名に依りて結ばれり！

この短き年月の、

我生涯の終る時、

神の御むれの善しを知る、

されば神よ、我祈る、

聖旨と愛に眼らしめよ、

凡ては汝のしろしめせば。

ヨセフが隊商に連れられて、エジプトに奴隷として行つた時は、彼の年僅かに十七であつた。そして彼が獄を出てパロ王の冢宰となる事の出来たのは、年三十の時であつた。これを以て見ると彼は丁度十三年、辛苦艱難の年を送つた事になる。

こゝで吾々の注意を要する三つの點がある。即ち彼の奴隷生活、彼の受けし大なる誘惑、及び彼の獄中生活、これである。殊に吾々の最も注意して學び度いと思ふ事は、彼が凡て此等の苦しい生活を通して、少しも傷つく事なかつたといふ一事である。人が私共に義しからざる事をした時、私共に悪い事をした時、私共を残酷な目に遇はした時、又私共が不人情な扱を受けた時、誘惑に遇つたり、不幸に陥つたりした時、此等の事から少しの損害をも蒙らない様にするには如何すればよいか、これは大に學ぶべき價值がある。今

ヨセフの苦しい生涯の、以上三つの點に就て、如何に彼がこれ等の苦痛と困難
 ごとに打克ち、反つて其中から、神様の御恵を戴いたかを、お互に研究して見た
 と思ふ。

ヨセフの奴隸生活は誠に傷ましいものであつた。奴隸になると云ふ事は何時
 だつて苦しい事である、自分自身の體でありながら、自分の所有で無く、他人
 の下にあつて、骨が粉になる迄こき使はれ、脊が曲る程な重い荷を負はされね
 ばならぬ、親方からはぶり／＼となり散らされ、自分の働いた賃金すら貰ふ事
 は出来ず、市場で賣買される獸の様に人に使はれなければならぬ。

ヨセフはさういふ奴隸であつた、彼の兄弟が商人に彼を賣つたのである、ポ
 テハルと云ふ人が彼をエヂプトの市場に見て、カナンから連れて來た商人に幾
 らかの口錢を拂つて、丁度馬か牛かを買ふ時の様に彼を調べて買ひ取つた、此等
 の事が少年ヨセフの心を何んなに惱した事であらう！ 彼が兄弟から受けた待

遇を思ふ時に、彼の心はどんな感じがしたであらう。彼等はヨセフを家庭から
 奪ひ去つた、そして彼を殺さうと謀つた、彼等は不人情極まる残酷極まる取扱
 をして、其上ヨセフを奴隸に賣つて了つた。斯様な不都合千萬な目に會はされ
 て、猶溫和な心を保つと云ふ事は確かに六ヶ敷い事である。

然しまだ／＼之に加へてヨセフには苦しい事があつた。彼には今一人も知つ
 た人が居ない、行き違つて通る人の顔に、どの顔も、どの顔も知つた顔がない、
 彼は全く一人ぼつちであつた、此國には一人の友達も居ない。それに自分の好
 きな所に行けるではなし、自分の好きな事をする事も出来ない。エヂプトに
 は多くの青年がやつて來る、彼等は金錢なく、友なく、全くの一人ぼつちかも
 知れない、然し此人達は希望に満ち、勇氣満々、自分の好きな職を擇んで、成
 功の道に着々進んで居る。然るにヨセフは如何、ポテハルに買はれた奴隸であ
 る、自由を奪はれて居る、これ程情ない事が何處にあらうか、此の苦しい試み

をヨセフは受けたのである。彼が其兄弟から受けた待遇は、彼を苦しませるに充分であつた、彼の今の境遇は彼の心を打ち碎くに充分であつた。不正、奸謀、不信のこの様な目に會つた人は多く世を罵り、人を呪つて恐ろしい人になるものである。ヨセフの十分の一も、苦しみを受けないで、もう世を怨んで、やれ世間は冷酷だ、不人情だ、恩知らずだと罵る人がある。又一方には苦しい生活をなし、酷い目に遇つた爲めに、頑な、世を拗た人間になつて、自分が酷い目にあつたから、人も酷い目に遇はせてやらう、所謂仇を以て仇に報ゆる生活をする人が多い。又或者は自分の受けた苦しい生活に不平たらしく従つて行つて、大洋で難破した船の様に、彼方よろしく此方よろしく、神の目にも人の目にも情けない生活をするものもある。

ヨセフが経験した様な不公平な残忍な目に遇つた人で、其心を清く又平坦と保つて、深く神を信じ、少しも失望落膽しないで生活する人は少ない。ヨセフが

此苦しい誘惑に遇ひながら、猶且つ少しもこれを意に介する事なく生活したと云ふ事は、如何に彼の精神が健全であり、彼の心が美しかつたかを示すものである。彼は決して人に辛く當らなかつた、彼は陰気で、執拗な又失望した人間にはならなかつた。奴隷ではあつたけれども、彼は喜んで其職を受入れ、勇み進んで其新生涯に就き、自分の仕事を忠實に務めたので、間もなく摘んでられ主人の近侍となつた。彼は自分の不仕合を泣いて無駄な時間や力を浪費する様な事はしなかつた、自分の不幸を悲んだり、自分で自分の身を哀れんだりしなかつた——それは最も賤しい最も男らしくない感情である。彼は又怒つたり、腹立つたりして愛の心を失ふ様な事はしなかつた、自分の不幸を何時までもよく思つてゐなかつた、彼は過去を忘れ只未來をのみ望んだのである、外の方を見て内の方を見なかつたのである。

或る詩人が苦しい生活をした人の事を、「悲しみは彼の心を刺し貫き彼の眼を

曇らせり」と歌つたが、ヨセフの身を圍んで居つた禍は、彼の心を犯す事は出来なかつた、これは彼が勝利の生活を送り得た一つの大きいなる秘訣である。彼の心の中にあつた希望の光は、常に明々煌々と照り輝いて居つた。彼の周囲には嫌ふべきものがあつたけれども、彼は愛の心をたへて居つたのである。不都合なる事、不公平なる事、害を蒙りし事、これ等を凡て堪へ忍んで、彼の心はこれを赦してやつて居たのである。彼を失望させ落膽させて、彼の魂を打ち砕かうとした幾千の出来事に遇つても彼は望を失はなかつた。他の人が價値のない生活をする事が、一層彼をして價値ある生活を願はしめたのである。彼は酷い目に遇ひ、憂い目に遇つたから、一層自分の周囲の人々に我を忘れて熱烈な愛を以て仕へようとしたのである。彼の今の状態が苦しい状態であること云ふ其事が、彼に取つては勇猛に豁達に生活をしようとする新しい動機となつたのである。實にヨセフの心は此の悩み多い境遇の下にあつても少しも失望しなかつた。

これは我々が輕々しく見逃してはならない教訓である。多くの人が人生困難なりと云ふ、或時は不正不義が其生活を一層厭はせ、又或時は日々の生活が一つの戦であり、迫害であり、醜惡の暴露、矛盾の連鎖、嘲弄、批評である如く感ぜられる時がある。家庭の生活は理想的に愛し合ひ、勵まし合ひ、助け合ひ、凡ての事親切と愛に満たされた生活であるべきである。而も世にはヨセフのそれよりも劣つて、嫉み、我儘、殘忍が愛の代りに全家庭を掩つて居る家がある。又常に反對主義で不正な敵對をする人と暮して行かなければならぬ人々がある。殘酷な親方から、苛虐な堪へ難い仕事にこき使はれ、其半分位の報いしか貰へない奴隷と等しい程な生活をさせられて居る人もある、慾の強い人から、だん／＼虐げられ、卑劣な人、不正直な人、貪慾な人から、随分惱まされて居る人もある。

こゝで教訓を得る事を忘れてはならない、生活の問題は、凡ての不義不正な

人々の間に住んで居ても、其心を温かく親切に保つて行くと云ふ事である。人生の種々な困難の場合境遇にあつても、心を勇ましく快活に保つて行くと云ふ事である。他の人が私共にどんな事をしようか、私共は義しい目的行為のために忠實であり、正しくあり、強くあるべしと云ふ事である。私共の内の生活は外界の刺戟に依つて左右されてはならない、周囲の人々が私共にどんな事をしようか、義しい事は何處迄も義しい事である、全世界が擧つて皆不信であり、私共はまだ不信であつても、私共は忠信でなくてはならない、よし最も親しい友達が私共に向つて我儘を云ひ酷い事をしても、私共は私慾を去り、又愛してやらなければならぬ、縦し災害不幸が私共の働きの結果に何物をも與へて呉れない時でも、私共は喜びに満ち希望に満ちて精神を壯健に保つべきである。青年は假令極く不十分な賃錢で仕へる様に強ひられても、自分の全力最善を盡して其仕事をなすべきである、一口に之を言へば、私共は何事にまれ、それが私共

の境遇に適せなくつても、常に敵に勝つて、信實に、氣高く、友愛に、快活に元氣に生活せよと云ふ事である。

これがヨセフの奴隷生活から學び得た教訓である、これは又以て凡てのキリスト信者の教訓とするに足りると思ふ。私共は身邊の禍をして自分の靈を害はしめてはならない、病める心不健全な心に囚れない様に努力せねばならない。私共は何物にも打ち碎かれてはならない、私共が奴隷の境遇にあつても私共の靈は自由でなくてはならないのである。

ヨセフは少しも失望せずして自分の職をよく守り、且つ大變才智があり、其上忠實で何事も任すに足りる男であつたから、ポテハルは凡て自分の所有を盡く彼に委ねて『その食ふパンの外は何をもかへり見ざりき』とある程であつた。若しヨセフが失望落膽して了つたならば、身の不幸を悲しみ嘆いたならば、又拗ねたり、不平を云つたり、或は憂へたり怨んだりして無駄に時を過したりし

たならば、彼は決して斯くの如き成功を贏ち得る事は出来なかつたであらう。此教訓を私共は學ばうではないか、非常に好い教訓である、——人生最高の教訓である、それは世に勝つたキリストイエスに於ける信仰の勝利である。

次はヨセフの誘惑に就て學びたいと思ふ。彼はボテハルの家に數年間居たが忠實に勤める所から大變主人に信用され、雇人の内では一番上の方へ擡んでられた。今青年になつたこのヨセフが、段々立身して行く事を思ふ時に、彼の少年の日の夢が眞となつた事を知るのである。ボテハルの妻はヨセフをもつと立身させてやるから、我心に従へよと彼を誘惑した、奴隸の軛から逃れる事が出来る、其國の紳士貴人になる事が出来ると云つて誘惑した。勿論彼は賤しい心を起しはしなかつたが、これが彼の受けた誘惑の主な部分であつた。

彼が其受けた誘惑を一層強く感せしめられた事情がある、ヨセフは家庭から遙か離れ友達からも遠く別れて居た、父も母も妹も彼の行を見て居ない、誰

も彼に清い信實な氣高い感化を與へる人は居なかつた。私共ならば悪い事はしてはならないと制せられて居る、其を破つて悪い事をする事はない、第一友達が私共に豫期して居る非常な信用が、凡の悪より私共を離れしめる。ヨセフは國を遠く離れて居る上に、又異教徒の國に暮して居つた、實に道德の標準の低い、情事などは普通になつて居る國に住んで居た。私共は周圍に高い理想を持つた人々が居て、いつも私共の品性に其感化を及ぼして居るし、且又過失をしたり罪を犯したりする様な事があつては、自分の恥を表白する様なものであり、社會の悪い噂も聞かなければならない所から、そんな事も爲ないのだが、ヨセフには自分を清くし強くして呉れる様な、社會的制裁と云ふものがなかつた、彼は恧んな事からして誘惑を一層強く感じたに違ひない。

然しながらヨセフはずつと高い、ずつと清い主義の上に立つて、此の誘惑と戦つたのである。聖書に依ると、彼は次の様に答へて居る。「視よわが主人家の

中の物をかへりみず、その有るものごとくくわが手に委ぬ、この家には我より大いなるものなし、又主人何をも我に禁せず、只汝を除くのみ、汝はその妻なればなり、然ば我いかで此の大いなる悪をなして神に罪をおかすを得んや』。

ヨセフのこの言葉の中には、二つの動機が現れて居ると思ふ、其一つは、彼が主人に對しての忠節である。ポテハルは彼を信用して居つた、彼の所有を凡て委す程に彼を信用して居つた。自分を信用して、これ程までに用ひて呉れる人に對しても、何うしてかゝる恐ろしい悪事を爲す事が出来よう？ ヨセフは恁んな行爲は、自分の友達であり主人たる者に對する裏切りであると思つたのである。彼は貴い家柄にある此婦人が、媚び諂つて願ふ其懇請を退けて、其熱烈な誘ひにも動かされず、彼女の怒が自分の身にどんな結果を持ち來すか、そんな事にはビクとも爲ないで、脇目もふらず自分の委ねられた仕事を守り、少しも動搖せず、

反つて誘惑する者を打ち破り、彼女の手を振り離して逃げ去つた、彼の靈は斯くして終に汚されなかつた。

彼を惡より救ひ出した其他の動機は、彼が神に對してもつて居た忠信の念であつた。『我いかで此おほいなる悪をなし、神に罪をおかすを得んや』、私共の犯す凡ての罪は、神に向つて之を犯して居るのである、『神にのみ、然り神にのみ我罪を犯せり』とダビデは其懺悔の中に云つて居る。獸を残酷に扱ふ事も神に對して罪を犯すのである、ポテハルに反逆する事も、神に對して罪を犯す事であつた。私共の成す事爲る事皆是神と關係がある、潔白、純清を汚す罪も神に對して罪を犯す事である、私共は私共の一生涯のどんな事からでも、神との關係を絶つ事は決して出来ない。凡てヨセフの受けた誘惑と同じ様な誘惑に遇つて、それに打負かされると云ふ事は——何人も皆これを知つて置くべきであるがこれ又神に對して罪を犯す事になるのである。

此場合に於けるヨセフの高潔な品性の他の一面は、彼が身に覺えない罪を着せられて、猶且つ沈黙して居つた事にも現れて居る。ポテハルの妻はヨセフが誘惑に應じなかつたので失望し怒つて、其夫にヨセフが最も汚らしい行爲をしたと訴へた。ヨセフは爲めに捕へられて獄に投げ込まれたが、彼はポテハルに妻君が反つて悪い事をしたのだとは一言も云はなかつた。是は彼がポテハルの名譽を重んじたからであらう、而して彼は其名譽を傷るよりも、寧ろ自分の名譽と自分の罪無き事との證の立つまでは、神様に何事も委ねて一時冤罪を其まゝに獄に入つて、主人の名を汚すまいと努めたのであつた。「彼の潔白なる點に於て、彼と同格の人もあるべし、されどそれは千人に一人。而して彼の慈愛の點に至りては一人も見出す能はず」と諺にもある。彼が一言ポテハルに向つて口を開くならば、凡ての事情は解るのであつたが、さう云ふ事はしないで、反つて甘んじて自分が其罪を負つたのである。身に覺のない事を疑はれ、自分の

立身出世を妨げられて、然もそれは一言云ひ開きをすれば、其疑は晴れると云ふ場合に、甘んじて其罪を己が身に着て獄に下る事程忍び難い事はない。他の人を庇うてやる爲めに己が恥辱や憎悪を忍ぶ人の無いではない、或場合には其が人の義務の如く思はれる時もあるが、併し中々行り難い事である。ヨセフは主人のポテハルに忠實ならんとして誘惑を退けた、然るに主人は彼ヨセフが戀の爲めに非常に賤しい罪を犯したのだと思つて、彼を惡んで牢に入れて了つた。ヨセフは斯くの如く爲られても心を清く楽しく保つて居た。

時としては、神に忠信たらんが爲めに、随分高い代價を拂はねばならぬ。ヨセフは今獄に縛れて居る、然し彼が正義を行つた爲めに受けた此損失は、彼が誘惑された其惡事を爲す事に依つて招かねばならぬ、損失と比べれば何でも無いのである。彼の獄は暗く冷いものであつたけれども、悪い事をして心を痛ませ、悔恨の苦き涙に其靈を暗くせねばならぬ事と比べては、獄屋は暗くとも眞晝の如

く明るい心地がするのであつた。身に繋がる、獄の鎖も、若し彼が誘惑に打敗れたならば、心に負はなければならぬ其重く苦しい鎖と比べる時には、羽毛の如く軽きを感じた。獄屋にあつて足は足枷を附けられて居つたけれども、彼は自由な人であつた、それは彼の良心に何等恐るゝ所が無く、彼の心が實に澄み切つて居たからである。如何程損失を招いても、如何程高い價を拂つても、如何程犠牲を出しても、神に向つて罪を犯さない方がよい。後に起る結果を恐れて悪い事をしてはならない、悪い事をして世に属ける譽を得るよりも、義しい事を行つて高い位置より突き落された方が勝つて居る。靈の純潔を汚すよりも、右の手を失つた方が勝つて居る。悔い惱んで悶死するよりも、獄屋に心を清く保つて枯死した方が勝つて居る。或幼き女帝は、城の窓にダイヤモンドの先で『我を常に清く保ち給へ、他の人を偉大ならしめ給へ』と祈りの言葉を書きつけたと云はれて居るが、此れが誘惑に打克つたヨセフの教訓である。彼は

罪を犯さない爲めには、己れの名譽を失つても獄屋で死んでも何事をしても悔いなくつたのである。

更にヨセフの牢獄生活に就て考へて見たい

彼れら足枷をもてヨセフの足をそこない、くろがねの鎖をもてその靈魂をつなげり。

彼が牢獄になげ込まれたと云ふ事は、實に彼の青年時代の一大障礙であつた。私共はヨセフが鎖に繋れて、暗い獄の中に閉ぢ込められた時、その心中如何なる感があつたかを想像する事が出来る。彼が神に對つて忠信であり、己れの職分に對して忠實であつた報は此の如きものであつた。彼は罪を犯す事を拒んだ、而して其れが爲めに今此處に彼は獄に入れられて居る。然も好悪なる彼の婦人は其身一つに同情を集めて、人からは氣の毒がられ、相變らず逸樂に耽つて居るのである。

ヨセフに取つて、此の牢獄生活は、初の内は苦しい事であつたらうが、私共は彼が此の牢獄に於ても、以前の如く直ちに人の尊敬を受ける様になつた事を見るのである。彼の心は未だ全く萎んで居なかつた、彼の内に宿つて居る氣高い靈は、彼が今苦しめられて居る此不幸此災難に依つて、愈々高められ清められて行つた。彼は失望せず落膽せず、凡ての生活に望みと喜びとを以て進み行く彼の平常の氣質をよく現した。『典獄、獄にある囚人をことごとくヨセフの手に付せたり』典獄そのまかせたる所の事は何をもちへりみざりき』ヨセフは常に其境遇事情に打克つて居つた。

嘗て或迫害の時一人の者が深い地下室の獄に投げ込まれた。そこには一日僅か半時間しか、陽の光が獄室の闇を照さなかつた。けれども彼は自分の獄室の床の上の塵の中から、一本の古鉄釘と一片の小石のあるのを見出して、其釘を鑿とし、其石片を槌として、一日僅か卅分間射し込んで来る光りを頼りに、

數ヶ月かゝつて其壁の上に十字架上のエスの像を怪げに彫り附けたと云ふ事である。

私共も人生の獄屋にある間、斯くの如く爲さなければならぬ、ヨセフは實に其を爲した者である。彼は己れの室の石壁に何等の像をも刻まなかつたけれども、彼の心の壁に、彼は希望と喜びと愛との像を彫りつけたのであつた。彼の人格は鎖に繋れて居なかつた、其足枷は彼の靈を惱ます事は出来なかつた、彼は凡ての不義不正、身に覺えなき難題、苦痛に打勝つて進んで行つた。彼は斯く随分長い間訓練を受け試みを受けて過したが、遂に獄から引出されて王の側に坐るに至つた。その名聲名譽の頂點に於てさへ、彼は平然として能く自らの偉大と、其好政治家たる事を顯した。

私共は此話の中から、人は如何んな境遇にあつても、常にそれに打勝つて行く可き事を學ぶのである。而して其秘訣は如何？ 曰く神に忠信なれ、汝自ら

に忠實なれ、汝の友に篤信なれと云ふ事である。聖書には斯く書かれて居る、
『エホバ、ヨセフとともに在す彼亨通者となれり』と、此は彼の奴隷の時の事
である。彼の牢獄生活の時に就いては斯く書いてある、『エホバ、ヨセフとも
に在して之に仁慈を加へ、かれのなすところをさかへしめ給ふ』と。若し私
共が神様に忠信であるならば、神様は私共を祝福して下さる。私共に取つ
て不幸の事であつても、神様はそれを通して、より偉大なもの、より勝れたる
者、より尊き者とし、一層有用なる人生を私共に營ませて下さる様に導き給
ふのである。

或る人がエリコの薔薇の話を書いて居る——其薔薇が、植物の生長に缺く
べからざる物の無い所で、如何して能く繁茂するか、暑い沙漠や岩の裂間や、
又は塵にうづもれた道端、積み重さなつた屑や廢物の中で、如何にしてよく繁
るのか、時には恐ろしい熱風のために根こぎにされて、遠く海上に運び去られ、

海の鹽辛い大浪に揉まれながら、暴風に依て流され行くことすらある、それで
も薔薇は枯死しない、やはり生長して行くのである。私共も此薔薇の如くに、
如何なる場合、如何なる境遇にありても——悲みにあつても、困難にあつて
も、不幸にあつても、悩みにあつても——それに堪へて生長して行かなけれ
ばならない。不死の生命が私共の内にある、私共は打負されてはならない、
キリストが私共と共に居給ふのである、キリストの生命が我内に宿つて居るの
である、何事何物に依つても、私共は打碎かれてはならない、キリストの御心
近く生活せよ、さすれば、世の力は諸君を害なふ事は出来ない、世の闇は諸君
の靈の光を暗くする事は出来ないのである。

尊き靈は塵と熱を通して
不幸、失敗より起ち上る、
強く、より強く。

心にある聖き自覺は
世の事に最早や眠らず、
最早や、

牢獄より宮殿へ

是に於てバロ、人をやりてヨセフを召しければ、
急きてこれを獄より出せり。

——創世記第四十一章十四節——

自分の仕なければならぬ仕事に、
勝誇つた歩調と快活な心を持つて當る人、
日々戦の生活を少しも恐れず戦ふ人、
こんな人が私は好きだ。
彼の望が消えても、彼は少しも神を疑はない。
即ち神は常に眞實な正しい神である云ふ信仰、
神は人類をよく導き給ふ云ふ信仰を失はない、
世の人の最も愛する實が彼の手から去つても、

彼は一滴の涙も流さない、
 不名誉な事をして暮すよりも、
 愛に結ばれて生きた方が優い、
 人を信じます、人を信じて、
 己れの最善をつくし、
 己れの不仕合をつぶやかす、
 笑をたゞ、望の言葉を以て、
 凡ての働く人を勵まして居る、
 勇敢な生活をして運命に克つ人、
 その人のみが一番偉いのだ。

—サラ・ケー・ホルトン—

この話は恰も小説か何かの様である。其日の朝、ヨセフはまだ獄に寝て居る

身であつた、彼は約三年間獄に繋れて居た、そして許されて其所を出る望みは少しもなかつた。それが其夕方になると、最早や王の指輪を手にはめ、立派な飾りの付いた衣を着飾り、頸には金の鎖を纏うて、王の次の位に座する身となつてをつた。これが實際だとしては、餘り不思議に思はれるが矢張り實際である。

私共は獄に繋れて居た時のヨセフの事を、一寸考へて見たい。彼は本當の罪人ではなかつた、彼は身に覺のない罪を負うて獄に下つたのである。私共は間違つた事を信じた爲めに、他の人に迷惑を掛けられない様に氣を付け度いと思ふ。他の人の悪い事は兎角信じ易い性質が吾等の内にある、私共は他の人の悪を念はず、常に愛の心を有つ事の出来る様に努め様ではないか？ ヨセフの此話には、他の一面がある事を私共は知つて居る、即ち黒い嫌疑の雲の下に、清く白い心を持つて居る人を見る。誰か——自分の知つて居る誰か——ヨセフの如く世間の人からは不名誉な事を云はれても、神の眼から其人を御覽になる

時は、少しも罪の無い淨い心を有つた人であつたと云ふ場合がありはしなかつたであらうか？ 私共は正義のため、慈愛のために、凡ての人に向つて辯解してやらねばならぬ。私共は人を誣ふる者の囁きや、それと無く人に當付けて悪口を云ふ其言葉に耳を借してはならない。虚言のためにヨセフは重罪人の衣を着せられ、鎖を纏せられたのである。彼の名を辱しめ、彼を牢獄に幽閉したのもその虚言であつた、私共は軽々しく人の罪を信じてはならない。一言の偽りの言葉に依つて、人が善い行をして得た所の名聲が、取り返しの付かぬ程傷けられるのである。

ヨセフは身に覺の無い罪を負はせられて獄に入れられた。彼が主人に對してかうしては悪事だと思つて居た其事、彼の清い心がさうしてはならないと拒んだ其事を、彼の主人は彼が犯したのだと信じて居つた。然しヨセフは自分の唇を閉ぢて、一言も自分の爲めに辯解する處なく獄に下つたのであつた。彼が自分

の爲めに辯解すれば彼の主人の家庭に汚れと滅亡を來さなければならぬ、それで彼は黙つて居つたのである。沈黙を守ると云ふ事は困難ではあるが、又沈黙は氣高い行である所以が此所にある。

私共の中、何人が讒言のために罪なき犠牲者とならないとも限らぬ、咎なくして私共は罪せられなければならぬ時があるかも知れない。キリスト信者として私共は憐れう云ふ場合、如何なる處置を取るべきであらうか？ 勿論凡ての場合同じではない、或時には辯解もしてよい、そして又それが私共の義務である場合もある、然し丁度ヨセフに於けるそれと同じ様な場合があるかも知れない、自分が辯解する事に依つて他の人に不名譽を來らし、迷惑を及ぼすと云ふ様な場合が無いとも云へない、憐れう云ふ場合には、私共はヨセフの如く沈黙し忍耐して其罪を負ふ事が、私共の義務であらうと思ふ。ヨセフは其誤りを正すべく何事もせず、凡てを只神様の御手に委ねまつた。詩篇第三十七篇に教

訓と約束とを示せる次の如き句がある。

なんぢの途をエホバにゆだねよ、彼によりたのまは之をなしまげ、光の如くなんぢの義をあきらかにし、午日の如くなんぢの訟をあきらかにしたまはん。

ヨセフはあの恐ろしい日に、彼の途を主の手に委ねまつつて、自分は少しも手を出さなかつた。彼は三年間暗雲に封ぢ込められて居つたが、遂に光の中に出された。然も彼の靈は一點の汚れだに受けて居なかつたのである。私共は安心して私共の辯解すべき所を神に任せ奉つてよい。

ヨセフは随分苦しい年を過した——子供の時から旅の隊商に賣られ、終にバロ王に迎へられて高貴の位に上るまでの十三年間は、實に苦しい年ばかりであつた。然しその苦しい年の間、彼は少しも心に傷を受けなかつた。或る小さい花は極寒の冬に降り積る雪の下に埋れながら、猶其立派な美しい姿を保ち、雪が

解けて春の日は訪れると、少しも其姿を傷はないで、恰も温室の内に育つたものの様に可愛ゆい香りの高い花を開く。それと同じ様に、ヨセフも長い歲月の間、兄弟から虐待られたり、奴隷に賣られたり、身に覚えなき罪を着せられて獄屋の人となつたり、不正、残忍、薄情、不義、不親切、様々の恐ろしい試の下に在つたけれども、少しも其の美しい立派な心を失はなかつた。少し許り、ほんの一吋、人から馬鹿にされた、喧嘩をした、目にも付かぬ傷を受けたとか、少し腹が立つた、少し不公平がある等と云ふと直ぐぶつと怒つたり、くよくよしたりする人が多い、私共は友達が一寸氣に入らぬ事をしたと云つては直ぐ恨んだり、悪く云つたりする。

ヨセフの此氣高い忍耐は、私共に凡ての場合、凡ての境遇、不親切にされても不正な事をされても、凡て此等の事に超越せよと教へて居る、これは人生に於ける一大教訓である。若し諸君が世相の變遷の都度、自分の境遇の變化の度毎

に動かされて——寒暖計の水銀が天候の加減で上つたり下つたりする様に、自分の心を動かされて居る様では、常に悲しい日に居なければならぬ、それはよい生活とは云へないのである。私共は心の内に神の生活の秘訣を握つて居る。私共は境遇に支配されてはならない、くよくよするのは病的な生活である、人を恨む等と云ふ事は、心に人間の血が通つて居り、殊にキリストの生命が藏せられて居る人の爲さない事である。失望するなどは神を信する人の恥る所である、私共は神様の恩恵に依つて強くならなければならぬ、私共は私共を愛して下さる神様を通じて、何物にも打ち負されてはならない、不幸、災害、苦惱、艱難を足下に蹂躪つて其を土臺とし、益々向上の道に進むべきである。私共は又己れに克つて心の敵を征服しなければならぬ、此が身を立てる道である。

私共は足下にあるものに依つて高くなる、

征服したものを土臺とし、
徳と勝利に依り、誇りを取り去り、
情慾を殺し、
又屢々出會す悪を制する事に依つて高くなる。

記憶せよ、諸君の生活に於ける問題は、一生涯の中に起つて来る不正、困苦、患難、苦惱、様々の悪しき事に遭遇つても、猶且つ其心を温厚に勇敢に強く親切に保ち、洋々たる希望を湛へて、常に快活であれと云ふ事である事。ヨセフも然したのである、故に彼は一朝大なる責任のために召し出された時に於ても、少しの失策なく其を成し遂げ得たのである。或日ヨセフの入つて居る獄の外の世の中で何事か起つた。パロ王の宮殿に出来事があつた、二人の位高き人に何か失策があつて、彼等は早速獄屋に投込ま

れた。此の事が何故聖書に書かれてあるかと云へば、それはヨセフが權威ある位に登用せられるに至つた、其奇しき攝理の端緒であつたからである。

私共の周囲をかこんで居る廣い複雑した運命の糸の少しの動きが、私共の運命に何んな變化を及ぼすか解らない、『神は常に異なる道を経て我等に至り、思はざる時我等と會し給ふ』。私共はヨセフの獄に、パロ王の二人の臣が來た事が、彼に取て如何に重大な事であつたかを知つて居る。私共は人生の行路を常に敬虔な心持を以て過ぎて行き度いと思ふ、つまらない出來事でも其れが後日私共の長い一生涯に如何なる變動を與へるかも知れないのである。ほんの一日今日或人と會つた事、其事が今後長い間私共に非常な利益を與へて呉ないとも限らない。ヨセフの生涯が、宮殿から來た此二人の囚人に觸たと云ふ事が、やがて獄から彼が召し出される運命の糸口であつた。明日諸君が一寸會ふ人が、諸君を獄から出して成功に導いて呉れる鍵を其手に持つて居るかも知れない。

けれども、長い間外から來た運命の手が、ヨセフの將來に何等の變化をも與へない様に思はれて居つた。ヨセフは或時宮殿から來た囚人等の見た夢の意味を解いてやつたが、三日目に彼の云つた事が事實となつて現れた。酒人の長は又元の職に復すべく喜び勇んで獄を出た、彼は出る時ヨセフに大變な禮を述べて別れた。ヨセフは彼に『然ば請ふ汝善くならん時に、我をおもひて我に恩惠をほどこし、吾事をパロにのべてこの家よりわれを出せ』と頼んだ、勿論酒人は左様する事を彼に約した、誠に彼は獄に居る此の友を憶えて居る可きである。然るに悲しい言葉が記事の終りに書かれてある、曰く『酒人の長ヨセフをおぼえずして之を忘れたり』。

彼は宮殿で又元の酒人の長として用ひられ、再び役人と呼ばれる身となつた、そして王の美しき龍顏を再び拜する事が出來た。一方ヨセフは獄にあつて、宮殿に仕へて居る友の盡力で罪を許され、獄を出る日を指折り數へて待ち望んで居

た。然し何日経つても其友が自分を憶えて呉れてる様子もない、やがて早や二年過ぎた、ヨセフはまだ暗い獄に鎖に繋がれて困んで居る、あれ程堅い約束をした酒人の長は彼の事を忘れて終つた。

この古い話の中の、エヂプトの役人のやうな人が、何時の世にもある。私共は此酒人が深い恩を忘れて了つた事を責めてやりたく思ふが、然し私共自身も彼が犯した様な罪を繰り返しては居ないであらうか？ 人から救つて貰つた時、助けて貰つた時、又好くして貰つた時には、私共はこの恩返しは爲たいと思つて居る、この親切は決して忘れは致しませんと眞實な心を以て云ふ、然し此恩を私共は決して忘れないで居るであらうか？ 私共は人から悪い事をせられた事は中々忘れない、人から不正な事をされても其を忘れて了うと云ふ事は多くの人に中々以て六ヶ敷い事である。よく人が「私共はあの人を許してやつた、然し彼から受けた待遇は私は決して忘れない」と云ふのを聞く。輕蔑、癩にさはる

言葉、不親切な行爲、無禮な振舞——如何に此等を私共はよく覚えて居る事であらう！ 或人達は之を忘れる所か、殊更に覚えようとする風がある。私共は困つた時に助けて貰つた事、親切な言葉で慰めて貰つた事、苦しい時に救はれた事を、本當に記憶して心に納めて居るであらうか？ 「人は屢々嫉妬の記録を大理石に刻み、寵愛の記録を水上に記す」。

こゝで私共は教訓を得る事を忘れてはならぬ、自分の受けた害や不正の記録は水上に記し、自分に與へられた親切は石に刻み附けて置きたいものである。此處で一寸止まつて考へて見たい、嘗て、諸君が何處かで其人に同情をよせて、訪問もしよう、援助もしようとする約束した或人が、押し込められ、重荷を脊に負はされながらも不正を堪へ忍んで、苦しんで居る様な事は無からうか？——その約束した事を、諸君は忘れて居はしないだらうか？ 不幸な人を見る時、悲しんで居る人を見る時、困つて居る人を見る時、又は何か大打撃を受けて心を干

々に碎いて悲しんで居る人を見る時に、私共は親切に助力もして上げよう、氣をつけて愛しても上げようよとよく約束をする、然し私共は此約束を常に守つて居ると云へようか？ 彼等は私共の言葉に慰められ、私共の再び來らん事を願ひ、必ず御力添をするよと確く約した其助力を今か今かと待ち望んで居る、然るに幾度、私共は酒人の長がヨセフを忘れた様に彼等を忘れる事であらう。諸君の心が愛に燃えて居た時に、同情の確い約束を交した人が誰か無いか？ 諸君は直ぐにも訪ねて遣らうと思つて居つた、あの氣の毒な哀れな人に、一臂の力を借して遣らうと思つて居つた、その困つて居る人に助力を與へて遣らう、救つて遣らうと思つて居つた、然し此忙しい世に出た時に、諸君は其約束を忘れて了つた『然るに酒人の長はヨセフをおぼえずして之を忘れたり』彼は二年の間ヨセフを忘れて居つたのである。

約束をした人が、其約束を守らないために、忘れられたるヨセフが到る處に

居る。私共は私共が嘗つて非常に熱心に快く約束した人々の事を思ひ出さなければならぬ。其後私共は常に其人の事を思つて居たであらうか？ 約束した人に、慰めになる様な何事かを嘗て爲たであらうか？ 私共が與へようよと約束した其の親切を豫期して、長い間倦まず弛まず待ち續けて居つたのに、私共が其れをすつかり忘れて了つた爲めに、其人が何んなに失望落膽したかを考へて見なければならぬ。

私共の心には、人を愛し、暗き世を一層明くし、重い荷を軽くして遣り、其路を一層平い路として遣り得る、計り知るべからざる程の力が存在して居るのである。私共を圍んで居るこの凡ての人の生涯は、其中にヨセフが鎖に繋れて横つて居る牢獄である。人々の周圍には暗い闇がある、空氣も濁つて居る、重苦しい沈黙を破る鳥の聲もせず、全く淋しい。然し諸君と私とは大空の下に鳥の歌を聞き、人生此上なき快樂を得、それ／＼喜びも楽しみも持つて居る、私

共は獄の中にある幾多のヨセフを忘れてはならない、彼等は、彼等が未だ忘れられた居ないと云ふ事を確かにする徴を望んで居る。私共の訪問、それが出来なければ少くとも親切に彼等の事を慮つて居ると云ふ何かの證據、若くは彼等を助け慰めてやらうとする何等かの努力を待つて居る。諸君は其心の中に力を與へ、慰めを與へ得る命の泉を持つて居るのである。弱り行く人の心に僅かでも新しい希望、勇氣、歡喜を與へる事がどんなに善い事であるかを考へて頂きたい、それは此世界に愛を來たらせる爲めに、神の御手傳をする事になるのである。其れは人の靈を救ふ爲めに、イエスのお加勢をする事になるのである。エミリー・デイッケンスが美しく書いて居る。

若し我、心傷めたる一人をだにも救ひ得ば、
我生活は無駄ならず、

ひとり憂慮を去り得なば、
一人の苦痛を醫し得ば、
弱りし知更鳥の一羽をば、
助けて其巢に返し得ば、
我生活は無駄ならず。

さて不思議な事が又起つて來た、酒人の長がヨセフの事をパロ王に長い間語ら無かつた事が、結局ヨセフの爲めには善い事になつて顯れた。若し此酒人の長が直ちに王の前に出て、ヨセフの事を哀訴したとして、パロ王が其願を聞き届けヨセフを獄から出して遣つたとするならば、其結果は何うなつたであらう？ヨセフはポテハルの家に歸る事は出来なかつたに違ひない、そして多分其町から外へ買ひ飛ばされたであらう——何故なればヨセフは未だポテハルの奴隸であつたからである、或はヘブロン地に歸る様にせられたかも知れない。何れ

にしてもパロ王の夢を解く爲めに、ヨセフが探された時には、彼を連れ出す事が出来なかつたに違ひ無い。

其結果を考へて見るに、彼は一生賤しい身で其生涯を終つたであらう、多分彼の噂は再び聞く事無く、彼の興味深い話も決して書かれなかつたであらう。さうなるにパロ王の夢を解く人は誰も居なくなり、豊年が續いた其後で、あの饑饉が始まつた時には、どの倉にも何の貯もなく、重大な使命を帯びて居つたヤコブの一家族も、恐ろしい大饑饉のために、此地球の上から一人残らず死に絶えたであらう。

然し酒人の長が恩を忘れてヨセフを獄に残し、不公平な苦に與らせた事が、よし許す可からざる事にしても、併し其は後日彼をして驚く可き重大事を務めさせる爲めに、時期来るまで彼を獄中に置いたのであつた。神様の目的がだん／＼外の方で熟しかけて來て居る時に、ヨセフの品性は獄のなかで力を増し、

修養を積んで來て居つた。

此處で私共は神様の奇しき攝理の働さを見るのである——神様のなさる事が其起るべき時にはキチンと起る其有様を見る事が出来るのである。何事も一分と早く來過ぎる事は無い、どんなつまらぬ事でも、一秒と後れて起る事は無い、神様の攝理は神様の持ち前の様に思はれる。數ある星も少しも其運行を間違へない、多くの學者が數千年前に天體の運行、蝕の作用、行星の交會を計算したが、今これを見るに其計算は一秒も狂つて居ないのである、太陽は嘗て遅れて登つた事なく、どんな星も早過ぎて顯れた事が無い。斯くの如く攝理に於ても、凡ての事が定められた時にはキチンと始まつて來る、神様の御持ちになつて居る時計は、決して一秒も遅れる様な事はない。これが偶然の出來事と云へようか？此自然の完全な調和が偶然の事と云へ様か？この攝理の不思議な美と恩恵とが偶然であり、單に幸福のはてしない連續であり、間のいゝ暗合に過ぎない

と云へようか？ 決して然うではない、其れは此全宇宙を統御し給ふ我等の父なる神様が存在なさるからである。凡ての事を中心となつて心を配り給ふ者があるからある、どんな事でもチャンと聞いて御いでなさる、凡てを知ろしめす神が居給ふからである。

ヨセフの生涯を見るに、何んな小さい出来事でも、終には其れが一々好結果を齎すことゝなつて顯れて居る、彼を賣つた兄弟の薄情な行も、彼を獄に入れられたポテハルの妻の全然の嘘も、二年の長い間獄に淋しく友もなく暮させた酒人の長の恩を忘れた仕草も——凡て此等の人から受けた禍が、神様の御手に依つて幸に代へられた。

私共が此話を讀む時に、是が凡てヨセフの生涯に顯れて居る事を見るのである。私共はヨセフの生涯が神様の特殊な御恵みの中に護られて居つたと考へてよからうか？ 此のヘブルの少年の生活に與へられたそれよりも神様のおめぐ

みが私共には少ないであらうか？ ヨセフは其當時神の御手が自分の上に加はつてゐることを知つて居なかつた——後日黒雲の裏面から銀色の雲が現はれ、あの酷い鐵の足械が黄金と化したその時まで、彼は少しも其れに心付かなかつた。失望、困難、悩み、不幸、他の人から受けた災、これ等がみんな私共に對する神様の攝理の或る部分となる迄は、私共はそれに氣が附かない。——然り、さうなる時まで私共には解らない、然し私共が凡てを神に任せて、しつかり強い信仰をもつてキリストに従つて行きさへすれば、『さうなる時』は必ず來るのである。神様は静かに働きなさる、決して周章してお働きなさらない。ヨセフの話から輝き出づる此光は、今日多くの望なき境遇に其光を待つて居る人々に、喜びと望みの光を與へるものである、神様の御心は何か事の起る毎に動き、神様の御手は常に働いて居る——たゞ其顯れるべき時機が神様の時計の面にまだ來ないと云ふに過ぎない。

遂にヨセフが救はれて高い位に用ひられる時が来た。或時パロ王が二つの夢を見られたが其は尋常普通の夢ではなかつた——其れは王に其將來を示し給ふ神様の手段であつた、彼が其民のまことの父となるであらうと云ふ御告であつた、ナイル河の畔で七つの肥えた牝牛が草を食つてゐると、七つの醜い瘦せた牛が現はれて、七つの肥た牝牛を悉く食ひ盡したがまだ元の通りに瘦せてゐた。七つの肥えた佳い穂と、七つの萎びて焼けた穂とがあつたが、萎びた穂が七つの佳い穂を呑み盡した、而かも其は前の通りに萎びて居たと云ふのが其夢であつた。此夢が王の心を痛ましめた、王はエヂプトの博士や法術士を召し給うたが、誰一人之を解き得る人が無い。そこで遂に酒人の長が、二年の間忘れて居た恩人の事を思ひ出して、パロ王に自分の夢を解いて呉れた、獄に居るヘブル人の奴隷の話をした。使者が大急ぎで獄に遣れてヨセフは王の前に召し出された、其時彼は年三十であつた。彼は十三年の間エヂプトに奴隷として、又囚人として居

つたのであつたが、今や彼が名譽を受け、其の職務を始める時が来た。後のこれまでの生涯は、實に此の時この務めに應ずる爲めの準備であつた。パロ王は自分の見た夢を語つてヨセフの答を待つて居られた、考の無い人ならば、自分の周囲の數寄をこらした眼を射る様な立派な御殿に召されたのであるから、グット調子にのつて意張りまはしてお答をした事であらう。然しヨセフは無邪氣な小供の如く謙遜して、「我によるにあらず、神パロの平安を告げたまはん」と答へた。此處で教訓を見落してはならない、私共はよく人に物を教へて遣る、物事に惑うた人が其解らぬ事を尋ねに来る、此場合私共は自分の學問を人に示さうと思つてはならない、反つて自分の事は隠して、自分達の告げ得る智識は、凡て神様から賜はるものである事を教へ示すべきである。「我によるにあらず、——神汝に答を賜ふべし」。

ヨセフは王に夢の意味を申上げた、それはパロ王に下さつた神様のお告であ

つた——未來を覗ふことの出来る一條の光であつた。エヂプトには七年間の太
いなる豊年がある、その後ついで七年間の大凶年が起る、而して豊年の時の
作物を皆食ひ盡して了うやうになる。斯う申上げた後、ヨセフは進んで王の取
らるべき手段を御注意申上た——即ち賢き人を選んで七年間の豊作の内から
貯を作り、來らんとする凶年の爲めに備へ、大きな倉に藏めて御置きなされ
ど申上た。

王は直ちにヨセフを抜擢して此名譽あり信用ある位置に坐せしめ、自分の指
輪を脱してヨセフの指にはめ殆んど王と同じ様な權能を彼に與へ給うた。而し
て皇族の資格ある印としてヨセフに白布を衣せ、金の索を其頸に掛けて與へ
られた。又王が街を御通りになる時には、王のもてる次の輅に彼を乗せて御連
れになり、彼が饑饉から國を救ふ其の偉業を顯す爲めに、ザフナテバネア——生
命のパンと云ふ意味——の名を賜ひ、且つエヂプトの祭司の女を與へて妻とな

さしめ、彼を祭司の族にまで取り立て給うた。

ヨセフは急にこの出世をした、無益に待たされたのではなかつたのである。
ドタンの窀に入られてから、エヂプトの高位に登るまで、其間は随分長かつ
たやうに思はれる、このヘブルの少年の見た夢が事實となつて顯れるには、随
分長い歳月を経た、彼の嘗めた人生の經驗は苦く、若い人の命を碎き滅すに充
分であつた、人生の春とも云へる此十三年が、無益に浪費された様に思へぬで
もない、然しながら私共は此長い歳月の間、是等の苦しい經驗を通して、神様
は彼を役に立つ一人前の男に御育てなさりつゝあつた事を學ばなければならな
い。酒人の長の夢は、三日にして事實となつて顯れたが、其が成就された時に、
其事は大した事でもなかつた、ヨセフの夢が眞實となつて顯れるには十三年掛
つた、其は其夢が非常な意味をもつて居たからである。若し人が一寸した事を
爲ようとする時には、其はほんの少しの用意で出来る、然し人が其帯びて居る大

使命を果さんとする場合には、それを成すまでに長い時が要るのである。神様の學校では、どんなに其進み方が遅く又のろくとも、短氣を起しては不可ない、神様が諸君を長く訓練なさればなされる程、其懲戒が酷ければ酷い程、其が終局を告げた時に諸君の生涯は偉大なものになるのである。

疑も無くヨセフは彼の生涯の此等の年に於て神の攝理を認めて居たに相違ない、彼は自分は今己れの使命のために、其準備をさせられて居るのだと信じて居つた、これが長い間の試練に遭つて彼が望を失はず、勇氣を失はず、日々の生活を楽しく過し得た秘訣である。彼は自分で今神様の學校に入つて居るのだと云ふ事をよく知つて居つた、攝理は彼の聖典であつた。思ふに丁度ヨセフの生涯にあつたと同じ様な事が、私共の生涯にも起るかも知れないが私共は其與へられた境遇を神様からのものとして受け入れ度い。左様する時に、私共は神様の御心のある所を、恰も神様が其の御手もて私共の前にある紙に書き示し

て下さる如く、毎日の出来事の内には、はつきりと其を讀む事が出来るのである。其時私共は不安な奮闘を止して、もはや自分自身の爲めに戦はず、神様の御旨のまゝに進んで行く様になるのである。

斯くの如くして、然り斯くの如くにしてのみ、人は此世に於て神様の求め給ふ如き者となり、命じ給ふ如くに爲すを得るに至るのである。神様は凡ての人、一人々々のために計畫を立て、おいでなされる、私共は神が毎日の出来事の上で顯し示して下さる神様の聖典を、毎日少しづつ讀むとに依つてのみ、其計畫を成し遂げる事が出来るのである。我等が失望に陥つた時、悲しみの内にある時、損失を招いた時、又他の人から害を受けた時、或は苦痛、惱みのうちにある時、いつも「神様は私に何か新しい教訓を與へて下さるのである、何か新しい仕事をさせる爲めに私を訓練し給ふのである、神様は今私に何か美しい品性を與へようとして居給ふのである」と云ひ得る人は、模範的生活を營んで居る

人と云つてよい。ヨセフの不思議な生涯のうちから、何か或一の事件でも抜にしたならば神様の攝理は駄目になり、臺無しになつたに違ひない。誰れの生涯に於てもさうである、凡ての事はみな神様が私共の爲めに備へてゐて下さる其事をする爲めに必要なのである。

私共は又ヨセフの採つた饑饉の時の爲めに、豊年の時に貯を作つて置くこと云ふ方法から、も一つの教訓を學ぶ事が出来る。誰の生涯にも物事が足つて、好まく行く何もかも得意の時代と、それから又貧乏で動きの取れない失意の時代が確かに来るものである。で順境の時に逆境の場合に處すべき貯を作つて置く事は、賢い人のする事である。

青年は豊盛な時代である、教育を受ける好機會があり、勉強し讀書し、修練し、良き習慣を作り、品性を修養し、立派な主義をたて生涯の事業の爲めに周到なる準備をなし、充分なる訓練をなす多くの機會を有つて居る。若し此豊富

な時代を徒らに浪費して、青年時代が益用されないならば、後年、不幸と困乏を招かなければならなくなる。物事が順潮に行き、體が丈夫な間に、必ず襲つて来る『雨の日』の爲めに、私共は少し宛でも貯を作つて置かなければならぬ、――病氣になつた日の爲め、私共の手は働く事が出来なくとも、醫師の禮は拂はなければならぬ、其日のために貯を作つて置く必要がある。歡喜の年の間、私共の心に來るべき悲しみの年のために、神の恩めを貯へて置くべきである。青年時代、成年時代を通じて老年時代に引出し得る様、常に其倉に貯を満たして置かねばならぬ。福音の榮光が私共の周圍に日光の如く注がれて居る其間に、私共は其れを心に受け入れて置かなければならぬ、でない

と、私共は暗黒の端し無い歲月の内に滅びなければならぬ。

神の爲めの解釋者

パロ、ヨセフにいひけるは、我夢をみたれど之をさく者なし、聞くに汝は夢をききて之を解く事を得るぞ云ふ、ヨセフ、パロにこたへていひけるは、我によるにあらず、神パロの平安を告げたまはん。

—創世記第四十一章十五、十六節—

毎日市場により集ふ

群のなかの名も無き男に

心の底より飾り無き

望み愛の言葉を吐かせよ

擲る打つの喧嘩のなかに

一つの囁き、短き言葉、

塵のなかより、友を起し、
死より靈を救ひし言葉！

—チャールズ・マツケー—

ヨセフは神のための解釋者であつた、聖書の中に彼が夢の意を解いてやつた二つの場合が記されて居る、其一つはエジプトの獄に於てなしたものである。二人の役人が宮殿から追はれて、彼と同じ囚人となつて來た。此時ヨセフは獄の中の監督に取り立てられて居た、これに就て聖書に愆う書かれて居る、「エホバ、ヨセフとも在して、之に仁慈を加へ、典獄の恩顧をこれに得させ給ひければ、典獄、獄にある囚人をことごとくヨセフの手に任せたり」と。宮殿から名ある人が囚人となつて獄に來た時も、彼等はヨセフの手を煩はしたのであつた。

或朝、ヨセフは平常の通り巡廻に行つて見ると、此等二人の者が何か悲しんで居る様子である、ヨセフは氣の毒に思つて、『汝等何故に今日は顔色あしきや』とたづねると、二人は共に昨夜夢を見たが、之を解き得る者が無いと答へた。ヨセフは心安げに『解く事は神によるにあらずや、請ふ我に述よ』と慰めて遣つたので、二人は代る／＼其見た夢を語り、ヨセフは彼等に其解釋をして聞かせた。彼は二人の者の爲めに、神の御告げが何うであつたかを示してやる神の解釋者であつた。

も一つの場合は、バロウの夢を解いた事である。王は一晚に二つの夢を見られた、朝これが大變心配になつた——其夢の意味が何うであるか知り度くつて堪らない。早速、夢の事なら大抵知つて居ると云はれて居たエヂプトの博士達を召し集めて見られたが、さて誰一人王の夢を解き得る者が無い。其時に酒人の長は、自分が二年程前に、ポテハルの獄でヘブルの奴隷に夢を解いて貰つ

た事、そして其が其若者が憐うなると云つた通りになつた事を急に思ひ出した。ヨセフは早速バロウ王の前に召し出されて、王が大變心配して居ると云ふ夢の話聞かせられた、『バロウ、ヨセフにいひけるは、我夢をみたれど之をどく者なし、聞くに汝は夢をさして之を解き得ると云ふ』。此時のヨセフの答は實に謙遜なものであつた、又彼が異教徒たる王の面前に、己れの信する神の御名をたゝえた點に於て、實に彼の答は大膽なものであつた、彼は『我によるにあらず、神バロウの平安を告げたまはんと答へて王に夢の解釋をして聞かせたのである。私共はヨセフがバロウの夢のなかに讀んだ神のお告が如何に重大なものであつたかを知つて居る。此夢の解釋によつて、如何程の災難、悲哀、荒廢が未然に防がれた事であらう、たゞにエヂプトのみでは無い、他の國々も救はれたのである。若し此夢の解釋者が無かつたとしたならば、此世界にどんな影響を及ぼした事であらう、ヨセフが王の夢の中に含まれて居る神の聖旨を讀み得たが爲めに、王は豊作の年の

收穫の餘りを貯へて、其後の凶年に備へることが出来已れの國民のみならず、外國の饑ゑてる民までも養ふ事が出来たのである。

斯くの如くヨセフは、神のための解釋者であつた、彼は他の人に神様がどんな意味の事を彼等に語つておいでなさるかを聞き聞かせた。或る著述家がヨセフの事を、彼はキリストの標本であると云つたが、確に彼の生涯にはイエスのそれを寫出したやうな多くの似寄つた點がある。我主の如くヨセフは父の愛する息子であつた、而して愛の音信を齎して彼の兄弟を訪ふべく父から遣されたのである、イエスも又其通りであつた。彼は其兄弟のために捕へられ銀の爲めに賣られた、神の子も又其通りであつた。辱しめられ苦められた後に、彼は遂に地に屬ける事で、其兄弟の助け人、此世の救ひ人となつた、イエスも死にわたされて人類の贖を成就し給うた。神のための解釋者としてのヨセフは、又大解釋者イエスの標本であつた、最も廣い意味で、イエスは此世に神の性と神

の意を明らかに示し、私共個人の生活に神の默示の意味を説明し給ひし唯一の解釋者である。私共が神様を知る事の出来るのは、只一人キリストを通してのみなし得るのである。「未だ神を見し人あらず、惟うみ給へる獨子、すなはち父の懷に在者のみ之を彰せり」。イエスが人々の間を歩いておいでなされた時に、人々はイエスに父を彰せと求めた、彼は之に答へて、「我を見し者は父を見しなり」と申された、神の性質の奥義はキリストに於て解釋された、イエスは神の愛を此地上に顯した人であつた。ヨセフは神の旨の含まれて居る多くの人の夢を解いた、イエスは人の問を聞いてこれに答へ、神の教へ給ふ意味を彼等に簡短明瞭に教へ給うた。私共がキリストの足下に坐す時に、凡ての疑は消え去るのである、實に彼は神のための大解釋者であつた。然し私共も解釋者と呼ばれ得る性質を持つて居る。ヨセフがパロ王の宮殿から來た二人の囚人の室に行つて見た時に、二人の顔には深い憂ひの色が浮んで

居つた。何故そんなに悲んで居るのかと聞いて見ると、それは彼等の見た夢の意味がどうしても解けないからだと言ふ事が解つた。彼等は夢には何か自分達の未來の運命を示す或意味が含まれて居ると信じて居つた、而して其の意味がどうであるかを知らうと思つて、其夢の事を心配して困つて居つたのである。世間の人もこれと同様である、悲し相な顔をして、何か心配のある事を其顔の皺に顯して居る、何か熱心に求めて居るけれども、其答が得られない、知らうと思つて一生懸命に焦つて居るけれども、何うも満足する事が出来ない。若し私共が悲し相な顔をして居る人毎に、其悲しい理由を對ねて見たならば、それは古い昔の此囚人の物語——即ち解らぬ疑問、釋けぬ謎、説明し得ぬ試練や神秘の爲めである事が解るであらう。

私共は皆解釋者が要るのである、此等二人の夢は誠に彼等の未來に就ての神様の言葉であり、一條の光を與へて彼等の運命を教ふる神様のランプであつ

た、其一つは生命のある事の豫言、其一つは死が目前に迫つて来て居る事の豫言であつた、二人の者はこの報知の言葉を解する事が出来なかつたのであつた。パウロ王の場合に於ても其夢は意味の無いものでは無かつた、其は王に教へられた神様の御言葉であつた、其は又來る可き日に起る事を知らせ、王に其民を愛めと教へられた最も重要な御言葉であつた。神様はパウロ王が此夢の意味を學んで呉れればよいがと思つておいでなされた、それは彼が、彼に未來の事を教へた新しい解釋者に従つて、行はんが爲めである、彼が將來若し王が其夜の幻の中で神様が彼の耳に御囁きなされた事を知り得なかつたならば、其は非常な厄であつたに違ひない、然し彼は解釋者無くしてこれを解く事は出来なかつたのである。私共もこれと同じ様に、此世の中で私共がどうしても解く事の出来ない多くの不思議な現象の中に立つて居る。其意味を自分自身では解き得ない夢や幻を凡て見て居る、然も此等のものは實際神様が私共に賜ふ所の言葉である。私共

が解して置かなければならない天啓である、そして此等の意味は私共が見出し得る様になされてあるのである。此等の内に私共が學ぶべき教訓が含まれて居る、此等の内に私共の悲しみを慰め、私共の暗い道を照し、私共の無智を教へ、私共の滅び行く生命を救ふ使命が藏されて居る。私共はこの天よりの言葉の意味を學ぶ事なくしては、本當の生活を營む事は出来ない、私共はこれを解釋して呉れる人が無くてはならないのである。

小さな小供を思へ、小供は何も知らないで此世に出て来た、どちらを向いても不思議な物許り——奇妙な自然の現象のなかにも、自分の生活の中にも、他の人の生活の中にも、書籍のなかにも、技藝のなかにも、或は學問の中、神のなさる事の中にも、悉く驚くと計りである。小供は何も知る事が出来ない、極く易しい文章も讀めなければ、極く普通の出來事の意味も解らない、然も其小供が自分の周圍に横つて居る神秘を學ぶべき時は此時期である。凡ての事

が神の言葉——將來善い人になり、安寧幸福を得る事に關しての言葉を含んで居る、而して小供がそれを聞き、其を理解する様になされてある。然し小供にはこれを解いて遣る人が要る、小供は産れると直ぐ物事を知らうとする、産れて二三週間も過つた小供の眼には、何か知り度いと云ふ慾望の輝きがある、少しお話が出来る様になると、これは何故かとか、あれは何かとか聞き始める、讀み書きを教はる様にでもなれば、愈々疑を増して来る、本のなかには不思議な事が一ぱい書いてある、だんく成長するにつれて、人生に就て不審を抱く様になる、「私は何故眼が見えるのだらう？ 何故耳が聞えるのだらう？ 何故私の心臓は朝から晩まで少しも休まないでうごいて居るのであらう？ 私の心の中で斯うしろ、あゝ爲てはならないと云ふ不思議な聲は一體何であらう？」

天然自然も小供には果しない不思議である、私共は時々小供が止め度なく質

問するので殆んど嫌になる事がある、然し實は彼等の周圍にある此不思議の數々、これ等の不思議な物象、彼等の知らない、彼等の解く事の出来ない此等の事は、彼等がどうしても知つて置かなければならない神様からの教である。小供が毎日『あれは何か？ あれは何故か？ それは何うしてか？』と續けざまに質問するからと云つて叱つてはならない、小供は此等の不思議な事がどう云ふ意味を有つて居るかを知る権利があるのである。若し小供がそれを知らうとしなかつたならば、彼等は智慧の足らぬ馬鹿になるであらう、小供が其れを學ばなかつたならば、彼等の生活は不完全なもの、半可なもの、情けないものになるに違ひない。小供の解釋者となつてやる事は私共の義務である。

母は小供に取つて最初の神の解釋者である、小供の最初の質問を聞き之に答へ、幾千の事物の意味を教へる。暫くすると其教師が代はつて小供の解釋者となる。

なる。教會も亦小供のために其解釋者となつて、最も大切な眞理を教へ、神様の事と、人類に對する神様の御旨——即ち神様はどんなお方であるか、神様は人類をどんなに可愛がつておいでなさるか、神様は私共が何に爲り、何をすることを求め給ふかを教へるのである。

然し解釋者を要するのは小供許りでは無い、私共の全人生を通じて始めから其終り迄、私共は自分ではどうしても解く事の出来ない、種々の不可解な事に多く會するのである、解くに困る多くの夢や幻を見るのである、人生は謎に満ちて居る、聖書を開ければ直に解らぬ句が現はれる。エテヲピアの大藏大臣なる人が、車の中に坐して深い興味をもつて昔の豫言者の書を読んで居つた、然し其言葉の意味が解らなかつた、これが私共の多くの有様である。『爾その讀むところの事を曉るや』と、車の傍に立つた解釋者が彼に尋ねた、すると此事に就て惑つて居た大臣は答へて『若われを啓く者なくば如何

で曉る事を得んや」と云つた。こゝに於て使徒は彼の傍に坐して彼が解き得なかつた言葉の中に、キリストの恵みふかき默示のある事を教示したのである。或る解釋者が來て其教の意味を明かにして呉れるまでは、誰でも句の意味を悟る事が出来ないで、其を持ち餘すものである。

然し私共が解釋者を要するのは、唯に聖書に書かれてある神の御言葉に就ただけでない、攝理のうちに顯れて居る御言葉も不可解である、誰の生涯にも時々此言葉が來る、黒雲に陽の光も見えない様な暗い日がある、星も光らない様な夜もある、悲しみに顔は曇り、重い心を抱いて一人考へる時もある、凡ての事が皆私共を悩ます、悩みと恐れに聲を立て、泣く様な事もある、然しこの攝理のなかに、神様の御教が隠されて居るのである、——恵の言葉、愛の言葉、善き言葉が、隠されてあるのである。

或る牧師が自分の小供と何か話をして居つたが、彼は机から一冊の本を持つ

て來て、其内の一節を指した。けれども小供は其語を解する事が出来なかつた、殆んど一字も讀む事が出来なかつた、それは彼の知らない國語で書いてあつたからである。父は其を自分の國の言葉に譯して其言葉の意味を小供に教へて遣つた、所がこれを聞いて居る間に、小供の顔がだん／＼晴れて來た、彼が讀んで居たのはギリシヤ語の新約聖書で、讀んで居た言葉は、キリストの唇から漏れた愛の言葉であつた。小供は自分の眼の前にある此不思議な文字の中に、美と祝福を示して呉れる解釋者を要したのである。神様の陰暗き攝理が、人間に了解せらるゝのも亦斯の如しである、攝理の内には神様の愛の御旨が藏つて居る、只それを私共は解いて聞かせてもらはなければならぬのである。

以上は私共が産れ落ちるとから、死んで墓に入るまで此世に於て、私共の凡ての周圍に横つて居る大神秘のほんの一端にしか過ぎない。神様は様々の方法

をもつて其の御旨を知らしめ給ふ——自然により、他の人の生涯により、不思議なる攝理により、歴史により、御自身の言葉により、書籍、友人、日常の出来事何一つとして神の御用に立たざるはない。然しながら又一方から云へば、幾度これ等の事が私共を感はしたであらう？ 私共はこの不思議を解いて呉れる解釋者が要るのである。

私共は凡てお互に他の人の爲めに解釋者とならなければならぬ、ヨセフは二人の囚人が悲んで居るのを見て、深い同情の念を起した、そして熱心に彼等を慰めた、是は彼のうちに氣高い心根があつた事を示して居る、彼は實に親切な温厚な心をもつて居つた。此世の中で偉い働きをした人で、世の苦い経験を嘗めなかつて人は一人も居ない、キリストは悩みと悲しみと罪のうちに居る人類を見て、これを愛する心を動し給うた、イエスの愛は直ちに悩める人の許に注がれた、彼はこれらの人々を助け救はうとなされたのである。私共は到る處に、

不安ど、破られたる平和と、満されない願と、答へられない疑問と、深い魂の饑を物語つて居る悲しき顔を見るのである。時には其青白い頬に恐れと不安を窺ひ見る事が出来る、時には其縫れ絡まつた出来事の中に、この先どう爲ようと途方に暮れた有様を見る、挫けた望み、未來を知らんとする醫されない慾望、時には又一層神の事を知り度いと云ふ熱心が其等の人々の顔に顯れて居る。

私共は私共各々の立場に於て、又私共が知つて居る種々の事に於て、解釋者たるべく遣されて居るのである。私共が此事を考へる時に、此世の凡ての大智識は神の解釋者を通じて生れ出でた事を思ふ、何時の時代にあつても、先覺者は常に天の光の輝きをむる山巔に立つて、神の教の意味を學び悟り、これを他の人に解釋してやつたのであつた、各時代に於ていづれも眞理の巻物を開いて、其内に含まれて居る言葉と意味とを讀破し得たる豫言者であつた。今

日私共が有して居る此科學的智識も、天然のうちにある神の御言葉を讀む事を學び得た多くの解釋者を通じて來つたのである。自然は一つの神の聖書である、昔、ダビデは歌つて曰く、

『しろくの天は神のえいくわうをあらはし
穹蒼はその手のわざをしめす、

この日こそばなかの日につたへ、

このよ智識をかの夜におくる、

語らすいはすその聲きこえざるに、

そのひりきは全地にあまれく、

そのことばは地のはてにまでおよぶ』

凡て自然の働きは、神より出る尊き御心が一ばいに書かれた書物である、然し誰もその言葉を讀み得る人が居ない、幾千と云ふ人が、自分の周圍に美しい樹や

花や、或は數へ切れない程色々な形をした植物のある此世界に生活して居る。山や岡や河や海や、又到る處に美しい景色がある、大空の燦爛たる光景、星の照り輝く天空、其の下に幾千の人が住んで居ながら、誰も其心を打たれてこれを讚めたへ、靈の眼を覺してこれに歡喜と讚美とを捧げようとする者はないのである。唯かゝる中に神の解釋者があつて——即ち見得る眼、聞得る耳を持つた人があつて、私共に神様の此自然界に御書きなされた不思議な事に就て語りくれるのである。

世界の文藝を見ても解る、文藝は數世紀の思想の收穫である、何れの世に於ても二三の人があつて、外の人よりも深い明らかな眼を以て眞理を見、又神の囁きを聞いて沈黙の谷から出で來り、その聞きし所を世に傳へたのである、即ち彼等は神の解釋者であつた。

今日私共が有して居る靈的眞理の富を思へ、如何にして其富が私共に與へ

られたか？ 私共は聖書が如何にして書かれたかを知つて居る、神はモーセを山上に伴ひ給うて、人が其友に語るが如く神自らの事や、其神性に就ての大真理を語り聞かせ、且つ彼に人を導くための律法を與へ給うた、斯くてモーセは神様が彼に示し給うた事に就て、此世の人の爲めに解釋者となつたのである。ダビデもまた神の解釋者であつた、神は彼を自らの心近く引寄せて、彼の靈に天よりの歌を吹き入れ給うた、於是ダビデは世に立ち、彼の琴を弾じて歌うたのである、而して其音樂は今猶世界到處に唱へられて居る。ヨハネも神の解釋者であつた、彼はイエスの胸に寄つて、その大慈愛心の鼓動を聞き、主の友と呼ばれ得る秘訣を學んだ、そして彼は人の間に出で、彼が聞き感じ視た事を世に語つたのである。世は爲めに其後一層の暖さを加へ、人の心に愛が一層行はれるに至つた。パウロも又神の解釋者であつた、キリストは彼を人の間より取り去り、自らを彼に顯し示して、彼にのみ 贖の神秘を教へ給うた、バ

ウロはそれを 私共が現今持つて居る、あの十三四通の書簡に著して、驚くべき感化を後世の基督教徒に與へたのである。然し此等の靈感を受けた人達のみが、神の解釋者であつたのでは無い、其後多くの人々が神の言葉の中に、隠れてゐた新しい奧義、惠ある真理、尊い慰の言葉を發見し、その見出した所をまた人に語つたのである、聖書からは常に絶間なく新しい光が輝き出で、居る。神様は凡ての人々に何か他の人に傳ふべき使命を與へて此世にお遣しになつた、神様は誰に對しても、其人自身だけに仕舞つて置く様なものは、何事と雖も決して御與へなさらなかつた、神様が、聖書の言に由り、一節の歌に由り、一片の花に由り、天にある星、一部の本、一人の友の心を通して、人の内心に與へ給ふ靈光の閃きは、再び人に告げ知らさるべき一の解釋である。神様が幽暗に於て諸君に告げ給ひし事は、これを光明に述べる事を神様は求めておいで

なざる。凡てのものの中心に、神様は其ものが此世界に傳ふべき何かを、與へてお置きなされた、神様は星に輝くべき使命を與へ給うた、私共が夜、天を仰ぐ時に、星は其秘密を語るのである、星の光りに路を求めて行く勞れたる旅人に、此星がどれ程の祝福を與へる事であらうぞ、又は窓にもたれて眠れぬまゝに、静かな高い空を仰いで居る病人が、其ピカ／＼と光つて居る星を見る時に、其心にどんなに慰めを受ける事であらうぞ？ 一片の花にも神様は美と温雅の使命を與へ給うた、花は其短い一生のうちに、其を讀み得る凡ての人に其使命を傳へて居る、そして其花が庭園にある時、又は病室に飾られた時になす、其よき働きを誰か一々計り知り得よう。

殊に神様は凡ての人類に解釋者たるべき使命をお與へなされた、或人には、其が學問上の新発見であらう、或る大天文学者は、彼が星の行路を發見し、天體の法則を研究する事は、全く神の御旨を讀み行くことであると語つて居る。

神様は詩人に美の思想を與へて之を世に傳へしめ、それに依りて、此の世を一層豊富に輝ける良き所たらしめ給うた。

斯くの如く私共各々の最も賤しき者にまで、神様は眞理の或秘密を語り、私共をして之を世に傳へしめ、他の人に與へしめ給ふのである。凡ての人が皆書を著し詩歌を作つて、人に祝福を與へる事は出来ない、然し私共がキリストの御心近く生活するならば、誰人にも神様は眞理の一片、愛と恩寵の或現示を其耳に囁き給はない事は無いのである、かゝる人に神様は悲しみのうちに慰めを與へ、暗き時に光を與へ、此世の煩のうちに天の榮光の輝を示し給ふ事を厭ひ給はない。

神様は其子供たるものには、それ／＼親密な交りをして下さつて、他の人が嘗て學び得なかつた愛の特殊の秘訣を各々に囁いて下さる、それが諸君の使命である——神様が諸君に賜ふ特別な言葉である——諸君はこれを再び世に傳ふべ

此世を最も祝福するものは、生活に於ての解釋である。私共の信仰箇條がどんなに良くとも、此罪と悲しみとの世にあつて、其箇條を清く美しい生活に顯して行くことがないならば、正統説と雖も何等の價値も無いであらう。或人がこんな事を書いて居る、或冬の日の事、其は男も女も毛皮の着物を着て、漸く其凍る様な寒さを凌ぐばかりの寒い寒い日の事である、皆はそんなのであるのに、一人の小供がぼろ／＼の着物を着て風に吹かれながら、寒さにかた／＼震へて、口もろくに利けず、新聞の呼賣をして歩いて居つたが、一人の美しい顔をした人が彼を呼び止めて「新聞はあるかへ？」と尋ねた、そして新聞を買取り、凍へて堅くなつてる小供の指を見て、其手に五十錢の金を入れてやつたが、其の時彼の目は親切に涙ぐんで居た。

「ア、憐れなる少き友よ！」

寒さに慄み震へるか？」
彼は小供に斯く問ひぬ。

小供は餘りのうれしさに、

す／＼泣く／＼顔を上げ、

心厚き人の面を見て、

「震へて居たり」と答へけり、

「あなたの通るそれまでば」。

これは本當の解釋の一端に過ぎない、私共は男にも女にも、キリストの愛を知らせる様に努力すべきである、そして其は只に教會の説教や、本の中の教だけでは決して出来るものではない、私共は此を日常の行にあらはし、生活のうち傳道の上に、親切に人を助ける其愛の内に、正直、勤勉、堅實、神聖を

産み出す真理のうち、これを顯さなければならぬ。

ヨセフは神の爲めの解釋者であつた、私共も神の解釋者とならなければならぬ、然らば如何にしてなり得るか？ 曰く、神様が私共に語つて下さる御言葉を開き得んが爲めに、神の御旨にそつて生活する事である、神様の御教をよく了解するために、神様の眞理を研究する事である。若しヨセフがあつた誘惑に負け、若し彼があつた悩み患ひの下にあつて、其心を荒まして行つたならば、又彼が惱める時に、神を信する其信仰を失つたならば、彼が外の人に神の教の意味を解釋してやる爲に召された時、彼は神の解釋者となり得なかつたであらう、だから私共も、若し人の爲めに神の解釋者たらん事を願ふならば、心を温厚に手を清く、信仰を強く、品性を立派に保つて行かなければならぬのである。私共は改めて、神の爲めの解釋者たる業と義務とを實行し始めたいと思ふ、それを人に傳へ得るために、神の言葉の意味をよく學び度い、惑ひのうちにあ

り、闇の中にある人の側に行つて、神の平和の言葉を語り得るために、神の妙しき攝理を知り得る鍵を手に入れたい、私共が日常の生活に、キリストの美德を示し得んがために、キリストの愛と其精神、其言葉を一層心に藏めたい。ホイツチャーは次の如く私共に教へて居る。

我愛する主の最もよき解釋者は、

へりくだりたる人の心ぞ、

生活の教ふる福音は、

書籍、巻物よりも勝れり、

計畫と信條の光り消ゆとも、

神の如き行ひこそ、後に残らめ、

聖き生活に顯れたる

尊き主を疑ふ人なし。

ヨセフと彼の兄弟

ヨセフ亦その諸ての兄弟に接吻し之をいだきて哭く、是のち兄弟等ヨセフを言ふ。

—創世記第四十五章十五節—

生涯のため、又喜びと悲しみと、
望みと恐れを生ずる凡てのものゝ爲めに、
舊き友を信ぜよ——そは、
愛を學ぶ勵ましとなり又機會となる、
愛は如何なるものにしても、又、
如何なるものなりしにしても、
又如何なるものなるにしても、
其を其時より終り迄保たんには——

「我はヨセフなり」と云ふ言葉が、エジプトの大宰相の口から漏れた時に、イスラエルの子等は非常に驚いた。彼等は一言も答へる事が出来なかつたに違ひ無い、彼の前で非常にまごついたに違ひない。

世の嫉みは賤しく見えなん。

—ロバート・ブライウニング—

話は後に戻り、エジプトには七年の豊年があつて、それから七年の凶作が始まつた、饑饉はヤコブの住んで居るカナンの地にも及んで、彼の一家も段々困つて來だした、其時ヤコブはエジプトに穀類がまだある事を聞いた。此の事に就てはユダヤの學者の間に、こんな美しい昔話が傳へられて居る、其は或日のこと、ヨセフは心優しくも、ゴセンにある彼の穀物の一ばい入つて居る倉から、少しばかりの穀物を取り出して其をナイル河に撒いた。すると其穀物が廣い河の面から海に流され、風や潮に運ばれ、遂にカナンの岸に打ち上げられ

た、斯くて彼はナイルの河の邊には、まだ穀物が豊富にある事をヤコブに知らせたさうである。

「まア、どんな風であつたにしても、兎も角、老いたるヤコブはエジプトにはまだ食物があつて、各地の民が其所に食物を買ひ求めに集まつて居る事を知つた。そこで一家の爲めに食物を求めに、自分の子等を遣さうとしたが、彼等は餘り其旅には行き度く無い様子であつた。父は彼等に勸めて、『汝等なんぞだがひに面を見合すや』とたづね、『我エジプトに穀物ありと聞けり、彼處にくだりて彼等より我等のために買來たれ、然ばわれら生くるを得て死をまぬかれん』と云つた。兄弟等がエジプトに使に行く事を嫌つたのは、何も不思議はない、彼等が其弟を買つた所はエジプトである、其は廿年以上も昔の事ではあるが、其記憶はまだ新しく彼等の心に残つて居た。私共にもよく忘れる事の出来ない事がある、エジプトと云ふ一言が、此等の強い人々には、肉を削ぐ刃の如く思はれる。

た、彼等は父から何度も催促されたに違ひない。

漸く十人の兄弟が行く事になつた、然し父はベニヤミンを一所に遣はさなかつた。

エジプトに着くと、兄弟等は總督の前に導かれ、地に頭を低れて此を拜した、ヨセフの夢は遂に成就されたのである。彼は自分の兄弟を見てこれを知つて居つたが、始めは知らざる者の如く装うて彼等を酷くあしらひ、荒々しく言を云つた。何故彼はさうしたのであらう？と昔に彼等がヨセフにした悪い事を報い様としたのであらうか？然うではない、ヨセフは彼等を試さうとしたのである、彼は其兄弟が數年會は無かつた間に、少しは善い人間になつたかどうかを試みようと思つたのである、そこで種々變つた事と、種々變つた方法とで彼等を試みたのであつた。

若し他の人が私共に禍を與へ、私共を酷い目に遣はし、私共に嫉み心を有ち、

恩を忘れる様な仕打があつても、只それを許してやる事だけが、彼等に對する私共の義務ではない、私共は人の靈に關して責任を有つて居る、私共は、私共に對して罪を犯させた彼の悪い性質を、取り去つて遣らなければならぬ、私共は彼等が再び他の人に向つて、そんな悪い事をし得ない様に、彼等を導いてやらなければならぬ。

ヨセフは其兄弟に、自分がヨセフであると言ふ事を聞かせる前に、彼等が廿年以前に彼を大層酷い目に遭せた其悪い心が、全然直つて居るかどうかを知らうとしたのである、彼等は後悔して居つたであらうか、或は未だ悪い心を有つて居つたであらうか？ ヨセフは間もなく、彼等が非常に昔の事を悔い惱んで居る事を知つた、彼は其兄弟達を、間者に違ひないと云ふ事にして、三日間獄に投げ入れて置いて、再び自分の前に連れ出したが、其時兄弟等はヨセフがへブル語を知つて居ないと思つて、「彼等互に言ひけるは、我等は弟の事によりて信に罪あり、

我等は彼が我等に只管に願ひし時に、其心の苦しみを見ながら之を聴かざりき、故にこの苦われらにのぞめるなり」と云つた。

ヨセフは彼等の話を聞き、彼等が何と語つて居るかを知つて居つた、彼には兄弟達が、彼に犯した罪を憶えて居る事も解つた、又其罪を悔いて、それが悪い事であつたと覺つて居る事も解り、そして今彼等の上へのぞんで居る此苦しきは、彼等がヨセフに犯した恐ろしい罪の報であると信じて居る事も知れた。私共はヨセフが今、兄弟等の心が、廿年以前に彼を酷い目に會せた時と同じであるかどうかを試しつゝあるのだと云ふ事を忘れてはならない、最初の試は彼等を勵ます事であつた、兄弟達は本當に後悔して居る様子である。ヨセフは深く感動させられた、聖書には「ヨセフ彼等を離れゆきて哭く」と記されてをる、これはヨセフが初めて彼等を見た時から、彼等に優しくして遣り、愛してやり度いと云ふ心が、彼のうちにあつた事を示すものである。然ば彼は其時何故直ちに

自分を表はさ無かつたのであらうか？ 彼は左様しないで、彼の心の深い愛着の念を抑へ、「我はヨセフなり」と云つて、直にも許して遣りたいのを耐へて、儼然として彼等の所へ歸つて来て、兄弟達が彼等の家に食物をたづさへて歸る間、兄弟の中の一人を獄に入れて居けと申渡し、彼等の目前でシメランを縛つて了つた。彼の心は彼等に對する愛に満ちて居るのに、何故こんな表面だけの苛酷を装ふのであるか？ 他でない、ヨセフは未だ充分に彼等が後悔して居るかどうか疑問に思つて居つたのである。彼等が後悔の念を起したのは、獄に入れられたが爲めであらう、心底から其根性が變つたのではあるまい、悪い事をしたのを、あゝ悪い事をしたと只悲んで居るだけでは未だ充分で無いのである、或人は今迄の悪かつた事を非常に後悔はするが、其悪い事をする靈が、まだ本當に直されては居ないのである、此等の兄弟は現在悲しんで居る其事を、明日再びしないであらうか？ ヨセフは未だ安心する事が出来なかつた、そこで

彼は自分が此點で満足の出来る迄、自分の名を名乗つて彼等を許すやうな事をせず、たゞ彼等をそのまゝ國に歸したのであつた。

九人の兄弟はヘブロン之地へ歸つて行つた、其途中彼等は食料を買つて拂つた筈の金が、食料と共に囊の中に入つて居つたのに氣が附いて大變驚いた。罪は何か新しい出来事のある度に、新しい恐れを其人の心に起させて、人を臆病にするものである。金を見出して兄弟は怖れた、此の親切に返して呉れた金を、彼等は何か恨みがあつてこんな事を爲たのであらう、自分達を又困らせる口實にこんな計策をしたのに違ひ無いと思つた。楽しい鳥の聲も、心に疵を持つ人には復讐の豫告の様に聞えるのである、私共の心の持ち様次第で、此世界はどうにも見える、心が平和であれば荒野も庭園と變り、刺も薔薇の花に見え、不律な聲も音楽に聞えるのである、然し心の疵は神の踏臺となつて居る最も美しい場所をも地獄と化する。

兄弟達は家に歸つたが、遂に又ベニヤミンを連れてエジプトに下つて來た、彼等は親切な待遇を受け、主宰も彼等の父——即ち「さきに語りし老人」——の健康をたづねた、ヨセフはベニヤミンの來て居るのを見て、弟のために心焚るが如く感じて泣くべき所を尋ねた、眼から出る涙が何うしても止まらない、彼は自分の室に入つて、思ふ存分泣いたのであつた。漸くの事涙を拭つて、彼等に涙のあとの見えぬ様顔を洗ひ、再び彼等の許に來て共に食事をした、然も猶彼等に自分を名乗らず、又家の方へ彼等を立たせたのである。兄弟達は今は大喜である、ベニヤミンは一所に歸る様になつて居る——もう何等の心配も無い、ベニヤミンを取られる恐れも無くなつた、シメランも獄から出されて皆ど一所に歸るのである。

然し彼等がどれだけも行かない内に、エジプトの役人が彼等を追うて來て、彼等が銀の杯を盗んで居ると云ひ出した、年齢の順に依つて囊を一つ一つ下

して探して見ると、果せる哉、無くなつたと云ふ杯はベニヤミンの囊の中に入つて居つた。彼等は膽を消す程驚いた、兄弟達はヨセフが或目的の爲めにベニヤミンの囊に其杯を入れたのだとは少しも知らないものだから、ベニヤミンが其れを實際盗んだのだと思つた、何事も彼に悪く當つて行く、ベニヤミン——彼等の一番年若い弟、父ヤコブが非常に自慢して居る其子が——盗人であつた様に思はれた、彼は兄弟達の顔に今や泥を塗らうとして居る。こゝで私共は品性の試験がどうしてされたかを一寸氣をつけて見なければならぬ、若し此兄弟達が、廿年程前の人物と同じであつたならば、彼等はベニヤミンを直ぐ様、酷い目に會はした事であらう、彼等は此時どうしたか？

彼等は非常にこれを悲んで其衣を裂き、皆打揃つて市に歸つて來た、そしてヨセフの家に大急ぎで行つて、彼の前に地に頭して伏した、ヨセフは「汝等がなしたる此事は何故ぞや？」と云つて大變荒々しく彼等を詰つた。

彼等は非常にそこで謝罪した。「我等主に何をいはんや何を述べんや如何にして我等の正直をあらはさんや神僕等の罪を摘發したまへり、然ば我等およびこの杯の見あたりしもの俱に主の奴隷となるべし」と云ひ、ベニヤミンのみに其罪を負はせず、皆が共に立つて其罪を着ようとしたのである。

ヨセフは罪無き者を罰する事は出来ないと云つて「杯の手に見あたりし人は我奴隷となるべし、汝等は安然に父にかへりのぼるべし」と命じた。

こゝに試がある、この十人の兄弟は、ベニヤミンをエヂプトの裁判官の手に渡し、その犯したと云はれて居る罪を負せて、彼を殘して國に歸り去るであらうか？ 廿二年前のことであつたならば、此人達は然うしたでもあらう、然し今、私共はこゝに人間生活に於ける最も美しい一つの人情の顯れを見るのである。此兄弟達はベニヤミンを一人ぼつちにし殘して置きはしなかつた、ユダがベニヤミンの爲めになした雄辯は、宗教上の文學、世俗の文學何れに於ても最も

尊い自然に發露した雄辯の一つに數へらる可き者である。

『時にユダかれに近よりていひけるは、わが主よ、請ふ僕をして主の耳に一言云ふを得しめよ、僕に向ひて怒を發したまふなかれ、汝はバロの如くにいますなり、昔にわが主僕等に問ふて、汝等は父あるや弟あるやといひたまひしかば、我等主にいへり、我等に我父あり老人なり、又その老年子なる少者あり、その兄は死て其母の遺せるは只是のみ、故に父これを愛すと、汝また僕等にいひたまはく、彼を我許につれくだり、我をして之に目をつくることを得せしめよと、われら主にいへり、童子父を離るゝを得ず、若父を離るゝならば父死ぬべしと、汝また僕等にいひたまはく、汝らの季の弟汝等と、もに下るにあらざれば、汝等ふたゝびわが面を見べからずと、我等すなはち汝らの僕、わが父の所にかへりのぼりて、主の言をこれに告げたり、我らの父再びゆきて少許の糧食を買ひきたれといひければ、我らいふ我らくだり行くことを得ず、われらの

に歸り得る爲に自分は冢宰の奴隸となつてエヂプトに日を過さうとして居る。
 ヨセフはこゝに於て満足した、最初彼等が訪ねて來た時に、彼は彼等が自分に犯した罪を覚えて深く其れを悔いて居るのを見たが、此最後の試に於て、彼は彼等が全然變つた人間になつて居る事を見たのである。神様の恵が彼等のうちに働いて居つた、乃ち廿二年前に犯した罪を、彼等は今再び犯し得なかつた、悔改の情が彼等の心に深く湧いて彼等の心は碎かれた、彼等は今や兄弟として俱に立ち俱に國民生活の土臺を築かうとして居るのである。
 打ち明けるべき時機が漸く來た、凡ての疑がヨセフの心から拭ひ去られた、ユダが雄辯を振つて述べたこの願が終るとすぐ、ヨセフは他の人や従者に其室を去るべく命じた、誰の眼も今こゝに起る秘密の光景を見ては不可ない、只彼等兄弟だけが残つた時に——たゞ十二人の兄弟だけになつた時に——ヨセフは眼に一ぱいの涙を湛へ聲を擧げて泣き、彼等に「我はヨセフなり」と云つた。

これを聞いて兄弟等は果してどんな感に打たれたであらう！キツト初めには半ば驚き、半ば怖れたに相違ない、彼等の心には彼に對して犯した罪が再び思ひ出されたに違ひ無い、彼等が酷い目に會はせたヨセフは、今日の前に居るのである、彼はエヂプトの家宰で、彼等は其手中にあるのである、今やヨセフは意のままに彼等をどんな目にも遣はす事が出来る、廿二年前に彼等はヨセフを甕に投げ込んで殺さんとし、引き出したかと思ふと直ぐに又奴隸に賣つてしまつた、彼等はたゞ「作夢者」を對手にして居るのだと其時は思つて居た、然し今どうであるか、ヨセフは彼等よりもズツト位の高い身となつて居る、彼等がヨセフの前に一言なくして立ち、彼に一言答へることも爲し得ず、愕き懼れて居たと云ふのに何の不思議があらう？
 然しヨセフの心には、いつまでもかうして無言では居られない程尋ね度い事が一ぱいあつた、「請ふ我に近よれ、我はなんぢらの弟ヨセフ、なんぢらがエヂ

プトにうりたる者なり』と云つた、然し彼等を慰めて『然ど汝等我をこゝに賣りしをもて憂るなかれ、身を恨むなかれ、神生命をすくはしめんとして我を汝等のまへにつかはしたまへるなり……神汝等の後を地につたへんため又大なる救ひをもて汝等の生命を救はんために、我を汝等の前に遣したまへり』彼は猶語をついで、『然ば我を此につかはしたるものは汝等にはあらず神なり』と云つた。それから急いで彼等を父の許に遣して、この事を告げしめ、彼等が父と其家族のもの凡てを連れて歸り、自分の傍近くエヂプトの地に住む様に云ひ送つた。ヨセフはベニヤミンの頸を抱き、又すべての兄弟に接吻し、彼等と仲直りをしたうれしさに皆共に哭いた。障は今や取り去られ古き罪は許された、長い間別れて居た家族が再び一家をなし、別れて居つた者共が、愛と平和のうちに又俱に住む様になつたのである。

こゝで此物語を一寸止めて二三の活きた教訓を學びたいと思ふ。

ヨセフが其兄弟に對してなした此行は、私共が罪を犯した時に、キリストが私共に向つてなし給ふ行爲の圖解である。初め兄弟達がエヂプトに来てヨセフの前に立つた時、彼は兄弟等の罪を許さうと思つて居つた、彼等と仲直りをなし、好意をもたうと思つて居つた。兄弟達がヨセフに罪を犯した事を問はず語りにお互で話して居るのを聞いた時に、彼は顔を反けて泣いた程心を動かされたのであつた、彼の心は其時でさへ、彼等に對して少しの悪意をも持つて居なかつたのである。然し彼は直ちに『我はヨセフなり』とは云はなかつた、そして彼等の頸を抱いて泣きはしなかつた、彼は優しい情と其張裂る様な心を制へて、彼等を國に歸し、數ヶ月の間彼等の罪を許すことなしに過したのである。其はさうした方が彼等の爲めに良いと信じたからで、罪をゆるすこと云ふ事が、彼等に充ち溢るゝ祝福を與へる程の經驗に、彼等が達してゐない限りは満足する事が出来なかつたのである。

これと同じ様な事を、キリストは私共の罪を許して下さる時に爲し給ふ。私共が彼の御前に立つ時、彼の御心のなかには罪のゆるしが既にあるのである、私共は少しもキリストの愛を強請する必要はない。彼は罪の中にある私共を愛し、罪のゆるしを與へようとして居給ふ、然しながら彼は又屢々、罪を悔て居る者に、御自身の豊かに満ち溢るゝ愛をお顯しになる前に、試験に試験を加へてこれをこゝろみ給ふ。ヨセフの兄弟達は始めて彼の前に立つた時に自分達の罪を悲んで、『我等信に罪あり』とお互に云ひ合つた。

確に其は罪の告白であつた、けれどもたゞ罪を悲む事が、彼等を其悪い心から救つたであらうか？　ヨセフは最初にそれを怪しんで居つたのである。私共もキリストの前に立つ時に、只罪を意識して居るだけでは充分でない、『私は罪を犯しました』と云ふだけでよいのではない。此世の悲しみは死に至らしむ、其は罪が露はれたからの悲しみである、人の中で恥をかゝねばならないから悲し

むのである、罰せられなければならぬから悲しむのである。斯くの如き悔改はキリストを満足させる事は出来ない、彼の前に立つて自分の罪を悔いて泣いて居る人にも、彼は其人の心が變つて居ない以上は、中々御自身を御顯しなさらぬ、其人の罪をお許しなさらぬ。否かへつて冷淡な様に見せ、外見上では其人を酷く御扱になるやうにも思はれるかも知れない、神様の求め望み給ふところは、『神に循ふ憂』である、其は其人の生涯に何等かの變化を與へるもの、既に犯した罪をたゞ悲むだけでは無く、再び其罪を犯し得ない程の悲しみでなくてはならない。ヨセフは彼の兄弟が今迄薄情に残酷に取扱つてゐた父に對して、今や親切な心を以て仕へ、彼にした様な悪い事や嫉み心を出さないで、其兄弟を愛し慈しみ、すつかり生れ變つた新しい人間になつた事を見抜いた時に、直ぐ自分は彼等の弟である事を語り、彼等をゆるし彼等を受入れて、寛大なる愛を彼等の上に惜し氣もなく注いだのである。

キリストも斯くなさるのである、私共が眞面目に、本當に心から罪を悔ゆる時に、キリストは自らを私共にあらはし、自らを私共に知らしめ、罪を許して私共の心に平和を興へて下さるのである。ヨセフが其兄弟をエヂプトに招いて彼等を自分の側近く住ませ彼等を善くした様に、イエスも其罪の許された者を招いて彼の友とし神様の家族として、之に凡ての恵みと榮光を興へて下さるのである。

此話は私共が罪を犯した人を許す事に就ての義務を教へて居る。ヨセフが其兄弟から受けた禍より以上のものは、一寸考へてもあるまいと思ふ、而かも其原因と云つては何もなかつた、たゞ彼等の父が誰にも勝つてヨセフを愛し、少しばかり偏愛を示したので、兄弟達がそれを嫉んだ事から始まつたのである。ヨセフが自分の見た夢を質朴に無邪氣に兄弟等に話した事が一層其因をなした、嫉みが怨恨になり、怨恨の情がやがて人を殺さうとするに至つたのである。

るが、其れが神様の攝理に依つて奴隷に賣られる事だけで済んだ、其は實に残酷な薄情な悪事であつた、然し今其罪が如何にも美しく又容易に許されたのである。

ヨセフの心には、其兄弟に對して些しの復讐心も無かつた、彼の心はどんな苦しい事にも傷くことなく、數十年の間美しい情を保ち、愛の心を湛へて居つた。彼の兄弟が彼の前に跪いた時に、そして彼等が全くヨセフの権力の下にあつた時に、彼の其兄弟に對する昔の愛情が凡て復活つた、彼は兄弟の罪を全く許した、そして昔の如く彼等を愛した。ヨセフは王の前に彼等を自分の兄弟であると告白して、彼等を己れの側近く呼び寄せ、共に住んで細かい愛情をこれに注いだのである。

此は確かに美しい光景である——ヨセフは自分を殺さうと謀り、自分を數年間悲しい目に遇はした其人々を愛し祝福して居る。是をなしたものは人間の

美しい優しい情以上のものではない、キリストが此世に降つて罪を許す事の祝福を教へ給ふ前に、其十字架が立てられない前に、福音書が著され無い數世紀以前に、ヨセフは此教訓をすつかり學んで居つたのである。どうして彼は此を學び得たか？ 曰くそれは彼がこの長い歲月の間、神の御心近く生活したからである、斯して終に彼は罪を許す事の解釋者となつた。

こゝに教訓がある。ヨセフとキリストとの間の年代を、キリストと私共との間の年代に比べて見ると、私共の方がより多く長いのである、併し私共はヨセフが學んだより以上に、人の罪を許す此教訓を學んで居るであらうか？ ヨセフが受けたより以上の酷い待遇を、私共の中誰か受けた人があるであらうか、かゝる中に在つても尙美しい情、愛の心を保つてゐる者があるであらうか？ 恨みの情や復讐の念や、此等の悪い心が内に起つて來はしないか？ この酷い目に遇はされたヨセフが、己を憂き目に遇はした兄弟等の罪を許して居る

此光景を、どうか私共の心の底に、ヨセフの精神が滲み込むまで、よくよく覺えて置きたいものである。人生は私共の心に、たとへ一日たりともかゝる悪い心を貯へて置くには、餘りに短か過ぎるのである。

「我等がゆるす如く我等を教し給へ」——と、

かく我等はいのゑ。

我等も亦罪を犯せば、

日毎神の赦したる願へよと教へられけり

されど心石の如き時は何と祈るべきや？

「我等がゆるされたる如く我等もゆるす事を得しめ給へ」と、

キリストは天に求むる事を教へしや、

然らず！ 我が必要のため愛の自ら廣まるを望みて、

彼は罰限を附し給へり、

我等罪を犯し、者に背をむけ、
赦した願ふ聲に耳をかさずば、
負債ある者をいかで赦さん、
日毎の祈りを理解せよかし、
多く、少く、我等の救せし度に従ひ
遅かれ早かれ、報いあるべし、
多く、少く。

こゝで私共は又教へられるのである。即ち神様は人の悪事をも用ひて之を神の國の建設の助けとなし給ふ事を。ヨセフは兄弟に「されど汝等我をこゝに賣りしをもて憂ふる勿れ、身を恨むなかれ、神生命をすくはしめんとて我を汝等の前につかはしたまへるなり」と云つた。私共は彼の兄弟のした凡ての悪事が、却つて祝福を生んだ事をこゝに明かに見る事が出来る、ヨセフがエジプトに賣

られて行かなかつたならば、饑饉の時には何等の備もして無かつたであらう、残酷な悪事をした其人自身さへも、彼等の犯した罪の中から貯へられた其食物を食べたであらう、これは驚く可き真理である。神の御手は凡ての事の上に働いて居る、極悪の人のする事と雖も、神の設計と目的を妨げ、神の愛と恩恵とを無効ならしむる事は出来ない、勿論これに依つて罪が罪とされないと云ふ譯ではない、併し人の怒も却つて神の御名を稱へる様に用ひらるゝ事を示して居る。神の子等がその愛を示す爲めに、全力を盡して何事かをして居る時に起つた失策は、天國に於て最も大なる寶の一つに數へられるであらうと云はれてゐる。一少女が母を愛する爲めに、汚れて目茶苦茶になつて居る手巾を、ちやんと縁取した方が、裁縫師がしたのよりもすつと値打があるのである。キリストの御手傳をしようとして全力を盡して爲た時の其働は、よし其が不完全で瑕があつても、神の眼から見れば計り知り難い程の價值があるのである。私共

が生涯を振り返つて見る時に、昔これは間違つた事をしたと思つて居つた事で、今は其が私共の爲し得た事のうちに一番善い事であつたと氣付く様な場合が澤山ある、いつも間違ばかりして居る様に思はれるけれども、其がやがて皆私共の生活と活動の或る骨組となるのである。

猶一步進めて言へば私共の過でも、否私共の生涯に於ける罪ですらも、悔改めて赦しを得、神なる大建築者の手にうつされると、其が寺院の壁に使用されるのである、ペテロの失策の結果も終には彼に一大祝福をもたらす様になつたのである。或人は云ふかも知れない、『私共が何か外の材料を差上げれば、神様は其御旨をなさるために、なにも私共の罪をお用のなさらなくとも可いではないか？』と、然し神様がこの様な材料をもつて、美と善とお作りなさると云ふ事は私共が悔改をする上に於て一つの慰となるのである。私共は自分の既に行つた悪い行爲を消滅させる事は出来ないが、神様は其既に行つた

悪い事に由つて、私共に再び悪い行をさせる事を妨げ、且つ其をも天國の御用に使ひ給ふ事を知るのも悔改をする一つの慰である。

此眞理のために罪を餘り悔い無い様になつてはならぬ、私共は善い事がある様にと云つて悪い事をしてはならない、神様がその内から善い事を齎して下さる等と神様にたよつて居てはならない、さう云ふ事は憶断であり冒瀆である。此教訓は已に罪を犯した人のために、又不正な事をしたり、賤しい事をしたたりした人の爲めに云はれたものである、彼等は罪を犯さない人の如く振舞ふ事はどうしても出来ない、罪の記憶が常に苦痛を與へる、最もよいものは悔改ではない——罪を犯さない事が更に善い事である。然し一度罪を犯したならば、悔改ると云ふ事は寝むべき事で、神は其損失、傷害の内から善をお作りなさるのである、『汝等は我を害せんと思ひたれど、神はそれをよきにかはらせ給へり』。私共は凡て何時かは神様の御前に立たなければならぬ、終に私共が過ぎし

ではないか。

日に犯した自分の罪を嘆き悲まねばならぬ日が来る。ヨセフの兄弟達は、奴隷に賣飛ばした弟と再び遇はうとは夢にも思つて居なかつた、然し或日エチプトに於て圖らずも兄弟達はヨセフと相對して、彼の唇より「我はヨセフなり」と云ふ驚くべき言葉を聞かされたのである。ピラトは、色青ざめて、人から散々賤められたイエスを、己の前に立たせて、遂に主を十字架につけた、恐らく審判の日に彼は其目を上げてイエスを仰ぎ「我はイエスなり」と云ふ言葉を聞く事であらう、諸君はイエスに對して悪い事をしては居ないか？ 諸君はイエスを悲ませ、イエスを拒んではないか？ 主の幼子共を虐めては居ないか？ 眞白い大きな御座の前に立つて、其所に座し給ふ主の口から「我はイエスなり」と云ふ言葉を諸君が聞く日がやがて来るのである。審判の日に主が私共に自身をあらはし給ふ時、私共は恐るゝ必要の無い様に、否反つて主の口から漏れ出づる尊き御言葉を聞いて喜ぶ事の出来る様に、今からキリストに仕へて置かう

ヨセフと彼の父

彼等またヨセフの己にいひたる言をこゝこゝく之につげたり、その父ヤコブ、ヨセフがのれを載んさておくりし車をみるに及びて、其氣おのれにかへれり、

—創世記第四十五章廿七節—

落つる日と夕の星と、

又一つの澄みたる聲我を呼ぶ

我、大洋に漕ぎ出づる時、

洲の悲しみ無からしめてよ、

されど動くを見えし浪は眼り、

音もせず泡も無き途に潮満てり、

底ひなき深みより出でし浪の、

また原の住家に歸り行く時。

—テニソン—

ヨセフの性格は何處を見ても美しい、何處にある彼を見ても、彼は氣高く暮して居る、彼は小供の時には愛嬌のある子であつた、やゝ生長してからも随分苦い試を受け、禍を堪へ忍んで行かねばならなかつたけれど、彼の靈の美は却つて此時、少年時代よりも輝いたのである、彼は一時奴隸となつたけれども、その心はかゝる時にすら何物にも囚へられず、又動されなかつた、誘惑に遇つた時にも、彼の心は汚れなかつた、無實の罪を着て、己の犯さない罪を負ひ、鎖に繋れて獄に投げ込まれた時ですら、彼の心は碎れなかつた、彼の目を曇らせ、其心を暗くする様にされたに拘らず、彼の内にあつた光は輝き出で、其獄を晝の如く照し、陰鬱の氣を追ひ拂つて了つた、彼は失望落膽せず、反つて他の人を慰む

る者となり、獄に芳しき愛の香を満した、それから一躍残酷な獄の鎖を絶ち、闇より出で、エヂプトの王位近く坐する身となつた。

多くの人が艱難に堪へて、成功に失敗する、多くの心が試練の中に煌々と輝き出で、喜と名譽との中に却つて其輝を失つて了まう。然しヨセフは立身しても、心の美の一線をも曇らすことをしなかつた、彼は嘗て奴隷であつた時に、其賤しい仕事を取扱つたと同じ様に、冢宰となつてからも平然として其大事業に従事した、不意の立身に、最も高い名譽を得ても、其の爲め心を揺がされなかつた。

是に於て彼の試練はまた變つた、今度は彼の前に兄弟が現はれた——彼を奴隷に賣つた兄弟達が目の前に現はれたのである。これは彼の品性の苦しい試であつたが、彼は此試にも負けなかつた、彼の心には一點の黒い所もなかつた、歴史の上で稀に見る程の美しい有様で、其兄弟の罪を赦してやつた。

私共は更にヨセフの生涯の外の章に轉つて行かねばならぬ、こゝに於ても尙彼の美點は汚されず彼の輝は曇らない。私共は今ヨセフと彼の父に就て研究したいと思ふ、私共は彼が數奇を極めた其生涯の種々の經驗のうちにあつて、父を思ふ熱い優しい情を失は無かつた事を直ちに見るのである。

一寸考へると、彼が故郷の家を忘れたかの如く見ゆる出來事が一つある、それはヨセフに始めて子供が生れた時に、彼はこれにマナセと名を命けて、「神我をしてわが諸の苦痛とわが父の家の凡ての事をわすれしめ給ふ」と云つた事である。然し其は彼の家に此子供が生れて來て、父の記憶を全く忘れさせた云ふ意味で云つたのでは無い、此言葉はヨセフが家庭に對し、愛に對し、家族的關係に對して、どんなに焦れて居つたかを寧ろ示すものである。彼は此等のものから引離されて、十三年以上も人の情を知らずして過した、其が今彼の腕に抱かれて居る子供に依りて、満されたのである。彼は今自身の家庭をもち、新し

い喜びの中に、丁度春が生命と花と葉の榮光をもて地を訪れて来る時に、地が冬の淋しさを忘れ去るが如く、彼は苦しかった年の事を忘れ、人から愛して貰へ無かつた事をも忘れたのである。

然し彼はかように幸福な家庭の喜びの内にあつても、父の事だけは如何しても忘れる事が出来なかつた、兄弟が彼を訪ねて来た時の話の中にも、彼が父を思つて居る事が、度々窺はれるのである。カナンから来た此兄弟達はエヂプトの大宰相がその父の事を聞かうとして、彼等の言葉を如何だけ注意して居つたかを少しも知らなかつた、彼が兄弟達を問者の疑があると言つて威した時に——彼等を試して彼等の間にどう云ふ事が起つて居るかを知らうとした時に、彼等は「僕等はカナンの地の一個の人の子なり………季子は今日父と共に在る」と云つた、兄弟達は恰も自分の國の事等は少しも知つて居ない人に云ふ如く、何の氣なしに慙う云つたのであつた、然し此言葉はヨセフに彼の父はまだ生きて居

る事を語り、彼をして歡喜に堪へざらしめたのである。

兄弟達は一旦歸つて再び訪ねて来た、そして彼等が冢宰の前に立つた時に、冢宰が彼等に對しての初めての言葉は「汝等の父汝らが初にかたりし其老人は恙なきや尙いきながらへをるや」と云ふのであつた。兄弟達は此は高貴の人々のする禮儀の言葉であらうと思つて、別に何とも氣に留めなかつたが、然し此禮儀の言葉のうちには、子が親につくす孝行の優しい愛が含まれて居つたのである。ユダがベニヤミンのために辯じて、故郷にある彼の父の事を幾度か口にした時に、父が年老いて居る事、一人淋しく暮して居る事、ヨセフが父の手から奪ひ去られた時の事、父がベニヤミンを非常に愛して居る事——若しベニヤミンが家に再び歸つて来ない様であつたら、父は死んで了ふと云つて居る程深く優しく愛して居る事——を話した時に、ユダは今自分が語つて居る此話が、大宰相の心にどんなに觸れて居るか少しも知らなかつたのである。ヨセフがユダの言葉を

聞いて居る内に、彼を最も感動せしめたものは年老いて悲しい日々を過して居る彼の父の話であつた。ユダの話が終ると、ヨセフは思ひ切つて——もう自分の事を黙つては居られ無くなつて、すゝり泣きしながら「我はヨセフなり」と云つた、そして其直ぐ次の言葉は、「わが父はなほ生きながらへをるや」の一言であつた。暫く過つて彼は驚いて居る兄弟達の心を静める爲めに全く其罪を赦し、兄弟に急いで父の許に歸る様に命じて——「我父」彼は今かく云ふのである——父に語つて「汝の子ヨセフかく言ふ、神われをエヂプト全國の主となしたまへり、わが所にくだれ遅疑なかれ……」と、又兄弟に「汝等わがエヂプトにて享る顯榮となんぢらが見たる所とを皆悉く父につげよ、汝ら急ぎて父を此にみちびき下るべし」と云つた。彼は又出来るだけ、この悪い道路を静かに易しく連れて來られる様な車を送り、其に加へて父が旅をする間、使ふだけの糧と嘉いものを廿匹の驢馬に引かせて贈つた。

此旅人等が漸くカナンに向つて進み行く間に、又古い家屋を壊して旅の用意をして居る間に、其から復た一行がエヂプトに向つて歸り來る間に、數週間は過つて了つたに違ひない。終に父がだん／＼近づき來つて居ると云ふ知らせがヨセフの許に達した、彼は車の用意をして父に會ひに行つた、誰か能く其愛情に満ちた會見の有様を語り得ようぞ？ 聖書には感情的な話は一切書いて無いが、然も其中に一二行の短い言葉で現した其時の光景は、誠に人の心を動かすに足るものがある、「ヨセフ父イスラエルを迎へ之にまみえて其頸を抱き頸をかへて久しく啼く」。願へば彼が兄弟への傳言と嘉き物とを齎らして、たゞ二三日と思つて、父の家の門を出たのは、ヨセフが丁度十七歳の時、早や廿二年の昔である、彼は其日の朝父の顔を見たいので、其後何十年の間胸に満ち／＼て居た父に對する愛情が、今この會見に迸り出でたのである。

賤しい所から身を起して、高い位置に登つた青年は、時とすると立派な友の

前を恥ぢて、自分の家族をまるで他人扱にすることがある、然しヨセフの氣高い性格は、こゝでも亦誠に美しう輝き出で、居る。當時エジプトは文明の度に於て、禮儀の重せらるゝ點に於て、又教育の度に於て、世界第一の國であつた。パロの王廷は實に結構を極めた宮殿であつた。然るに一方ヤコブは平俗な牧者で身分賤しく禮儀も知らず、名譽もなければ位もなく、饑饉に苦しめられ、老衰して只ヨボ／＼として居る老人である、この二人の懸隔は實に甚しい、一人はエジプトの宰相であり、一人はカナンの地の族長に過ぎない。然しヨセフの心に燃えて居つた父を思ふの情は非常に強く美しく、彼は地位の相違を省る事もせず、此老牧者を大意張で王の前に連れて行つた、そして彼はパロ王に恰もヤコブも亦王でいもあつたかの如く、熱心に自分の父の來た事を告げたのである、彼は父のためにエジプトの地を備へて、老年の父が生き長らへて居る限り之に孝養を盡した。ヤコブが正に死んだ時、ヨセフは父の側に侍つた、即ち老牧者

の傍にエジプトの宰相が其美しい最後の孝養をつくさうとして居るのである、ヤコブが死んだ時に、彼は父の面に俯し之を抱いて哭き之に接吻をした、其後王のその如き葬儀が營まれ、パロ朝廷の貴人、各地の名士がエジプトの國を饑饉より救つて呉れた人の父をあがめる爲めに、ヤコブの一族と共に之に従つた、其に數臺の車大勢の騎馬の人が加はつて、葬列を益々莊嚴ならしめた。此等の話に依つて見ても、ヨセフが如何に其父に孝行であつたかを窺ひ知る事が出来る、全生涯を通じて彼の心は常に愛の念が優しく燃えて居た、高位高官の榮職にあつても、彼はカナンの天幕に悲しく淋しく日を過して居る年若い父を、一刻も忘れる事はなかつた、父が寄る年波に腰もかゝみ、皺もよつてヨボ／＼と彼を訪ねて來た時に、彼は父を王の如く崇めたのである、父の餘生を彼は心を盡して樂しませたのである、父が死んだ時に、彼は王の葬儀をもつて之に榮を加へたのである。

これ等は凡てヨセフの氣高い性格を現して居る、こゝで學ぶべき教訓は誰にでも直ぐ解る、小供は其父を崇めよと云ふ事である、父母を愛せず之を崇めない事程人生の美を悲しく傷けるものは無い、父母は小供が未だ小さい間には、我を忘れて小供のために盡し、己れを殺してまでも子の爲めを思ひ、種々の心遣をして下さるのであるから、若し小供が其報として父母を敬ひ愛せないならば、小供は決して一人前になる事は出来ない。此御恩は私共が父母の尊い體を墓の中に安かに眠らせるまで、如何なる價を拂つても如何なる犠牲を拂つても、之を愛し忠實に仕へる事より外に復す道はないのである。賤しく貧しい家から身を起して富を得、榮譽を荷ひ、名を擧げた小供は、賤しい貧しい生活をして居る父を決して辱しめてはならない、世の中に名を擧げた人で、小供の時から自分を大事に可愛がり、人中に立ち得る力を與へて下さつた其父母を辱める人々が多い、老いて貧しく衰へた父母が、自分の子息の光り輝いた家から逐ひ出さ

れる様な事が屢々ある、然も父母は其小供の爲めに彼等が猶幼き時に何等の愚痴をも云はず、惜げもなく身を殺して働き苦しんだのである。彼等はこの質朴な飾り氣の無い無骨な老人を、多くの生意氣な輕卒な友達の前で、自分の親として敬ひ、孝行を盡すと云ふ事を、自分の不名譽であるかの如く考へて居る。彼等は自分の父母に不孝をする事が、友人の前で自分の賤しい父母を認める事に因つて、友人から辱められる其恥辱より數百倍の不名譽になる事を知つて居ない。世は凡て親を敬はない様に見ゆる事は、何事でも之を罰し之を誹るのである、社會と雖も此罪は許さないのである、是に反して自分の父母を敬ふ人は多くの人の稱讃を受ける。

ヨセフのこの美しい例は、親を持つ小供に、ごうか兩親の生きながらへて居る間、出来るだけ慰さめ喜ばせ、優しい世話をしたものだといふ深い希望を起させるに違ひ無い。私共が未だ幼かつた時に、父母は私共を大事にして私共

がどんな面倒をかけても少しも吐かないで育て、下さつたのであるから、父母が老年になつて體が弱くなられ、そして私共が丈夫になつた時には、其代に父母の御世話をし忍耐して孝養をつくさなければならぬ。

若し私共が富を得、何不自由なく暮す事の出来る様になつたならば、昔私共の爲めに汗水流して働いて、私共の生涯に幸多かれと祈り、貯へられた凡ての所有を分けて下さつた方に、自分の所有物を分けて差上げるべきである。若し私共が親以上の立身出世をなし得たならば、自分の其時の境遇に従つて、親を自分の楽しい生涯のうちに伴ひ來つて、其老年を安樂に送らせなければならぬ、父母の生活が醜い妙なものであつても、私共の優美な生活より父母のそれが少し位劣つて居つても、其は只外觀の事であつて、其心の内には愛の心が燃えキリストの心にも似た氣高い魂が宿つて居る事を忘れてはならない。『位も金貨の記號に過ぎず』で、最近に鑄造された金も古い昔造られた貨幣より勝つて美しく奇

麗なものではない。よし父母が罪を犯して其生涯に汚點を印し、人の恥を買つても、私共はノアの子等の如く、己の眼を閉つて親を愛する其愛のうちに父母の恥を包んで了ふがよい。

ヨセフと彼の父に就て、も一つ他に學ぶべき點がある、話はヘブロン地の事に戻つて、ヨセフが兄弟に自分の名を語つて、兄弟たちがエジプトから歸つて來た時の事である。彼等は父にヨセフがまだ生きて居て、エジプトの家宰になつて居ると告げた、然し父は此知らせを信する事が出来なかつた、彼は氣が大分顛倒して居た、廿年以上もヨセフは死んだとばかり思つて日毎に悲しんで居た、當時兄弟達が家に持ち歸つたヨセフの血の附いた衣は、どうしても彼の記憶から消えなかつた、ヨセフは死んだのだ——野獸に引裂かれて食殺されて了つた——と彼は少しも疑つて居なかつた。ヤコブはヨセフが生きて居るのを見ようとは夢にも思つた事がない、たゞ彼の望みは、自分の死んだ後ヨセフと再

び靈の國で相見ることが出来ると云ふのであつた、實際この十數年間ヨセフの噂は少しも此家に聞けなかつたのである。然るに今日ヨセフがエジプトにまだ生きて居ると云ふ事を聞くのは、この老父に取つては實に意外の意外であつた、

「ヤコブの心なほ寒冷なりき、其はこれを信せざればなり」。

彼の子供等は自分達の云つた事を父に信じさせ様と種々話して見た、父にヨセフの傳言を再三物語つた。其をヤコブが靜かに聽きながら思ひ惑うて本當かしら嘘か知らと種々考へて居る時に、ヨセフがエジプトから父を迎へによこした車が門口に着いた、エジプトから糧と嘉き物とを積んで來た驢馬も見える、ヤコブはやうやく合點が行つた、其氣が己れにかへつた、「イスラエルすなはち云ふ足り、わが子ヨセフなほ生きをる、われ死なざるまへに往て之を視ん」如何して其車を見てヨセフはまだ生きて居るのだとヤコブが信する様になつたのであらうか、車は當時カナンには無かつた、少くとも今ヤコブの家の前に置か

れた様な車は無かつたからである。此車は實に美事なもので、ヨセフや宮殿の人々が乗る車と同じ車であつた、ヤコブが此車を見た時に、彼は直ちに此車はヘブロンのものではない、又外の地方のものでも無く、確にエジプトから來たのだと悟つたからである。斯くして彼は漸く承知が出來た、ヨセフがたしかにこれ等のものを送つて來たのだ、ヤコブの家の戸口に運ばれた果物や他の種々のものは、疑もなくエジプトから來たものである、ナイル河の邊より他には何處にも出來ないものである。

こゝに又主イエスの生涯の一面の美しい例がある、ヤコブは既うヨセフは死んだものと許り思つて居つた、ヨセフの血の附いた衣も見居る、然るに今ヨセフは生きて居ると皆は云ふ、然しどうしてもさう信する事は出來ない、とは云へ子供等の言葉より他には何も證據とするものがない、彼等は眞面目に本當に話して居るのであらうか？ 彼等はよく嘘をつく、彼等の云ふ事は信用

出来ない、彼等は今父を欺かうとして居るのではなからうか？ 又彼等は思ひ違ひをして居るのではあるまいか、即ち彼等自身欺かれてゐるのではあるまいか？ ヨセフが生きて居る！ ヨセフがエジプトの家宰！そんな事があらう筈がないと老いた父は云つた。すると車や嘉き物がエジプトから到着した、こゝに於てユダは「ヨセフがあなたをエジプトに連れて来て呉れと云つて、此數臺の車を送つて来たのであります、そしてこれはあなたが途中で召上る糧で御座います」と父に云つた。

父は「ヨセフがこんなものを送つて来たのか？」と尋ね、車や糧を見やつて、漸く合點が出来た、「ヨセフは矢張り生きて居るのだ」此等の贈物はエジプトからでなくては他の國から來ようわけが無い、私を愛し私を慰めて呉れる人から送つて来たのに違ひない、誰か偉い人から送つて来たものらしい、と云ふのは王様の用ひられる様なものばかりであるからとヤコブは考へた。斯くの如くし

て此車や嘉き物が、長い間既に死んだものとばかり思つて、常に悲んで居つたヤコブの無事なることを信せしめたのであつた。

以上は私共が此世に於て天に居給ふイエス・キリストを信するに至る進路の暗示であり又其實例である、私共はイエスが悪者の手に依つて十字架に殺され給うた事を知つて居る、又彼の葬られた墓の石が、其の門より轉げ落ちてゐた事も知つて居る、キリストは生きて居給うたのだ、こゝに福音がある。こゝで再びキリストとヨセフの相似た點を見て頂きたい、ヨセフはエジプトに生きて居つた——これは彼等がヤコブに語つた所である、イエス・キリストは天に生きて居給ふ——これは福音が私共に告げる所である、ヨセフは又只生きて居る許りでは無い、エジプトの全地を支配して居つた、イエス・キリストは死を越し永遠に生き給うて、王の王、君の君として萬物を支配し給ふのである。然しヤコブはヨセフを其目に見る事は出来なかつた、また彼はヨセフが生きて

て居るとは信する事が出来なかつた、私共もイエスが其處に生きて居給ふと云ふ榮光の地を見ることは出来ない。私共は眼を大きく開いて、星の彼方を見上げるけれども、天から私共を見下して居る顔は一つも見えない、私共は主に向つて叫ぶ、然し私共の叫びに答へる何等の聲をも聞く事は出来ない。さらば十字架にかゝつて死給うたイエスが、今も尙天國に生きて在りまして、萬物を支配し給ふと云ふとは果して實際であらうかと直ぐ問ひたくなるのである。ヤコブはヨセフが送つて來た品物を見て、彼がエジプトに生て居る事を信するに至つた、キリストは私共に天より恵を送つて下さる、是が私共に天にイエスが實際生きて居給ひ、又萬物を支配して居給ふ事を證明して居るのである。貴君が神様の御前に頭を下げてお祈りをなさる時に、其祈りにお答の無かつた事がありますか？ 貴君の心に重荷があつて、貴君が悲しんで居る時に、天から慰の來なかつた事がありますか？

カナンの地は大饑饉であつた、到る處食物がない、民は皆餓えて居つた、然しエジプトには大きな倉が澤山あつた。この倉からヤコブの住所に嘉き物が送られた、誰か其を送つたに違ひない——彼を知り彼を愛して居る誰か送つたのでなくてはならない、兄弟等は其はヨセフだと云つた、老人は其言葉を信じた。

此世は大饑饉である、こゝに私共の靈の糧はない、其倉は天にある、毎日私共の門口に此倉から嘉き物が來る、恵がわかたれる。天には貴君の爲めに祝福が貯へられてある、其上に貴君の名前が書いてある、貴君の必要な時にはいつでもそれが來る、丁度好い時に其が與へられるのである。『天には誰か自分を知つて居る人が居るに違ひない』誰か私を見守つて居て、私に何が要るかを知り、丁度要る時に其嘉き物を私に贈つて呉れるのに相違ない』と定めし貴君は云ふであらう、然うです、その誰かと云ふのがキリストです。イエス

はシリアの星の下で死なれたのでは無い——イエスは生きて天に居給ふのである、だから主は貴君を覚えて、貴君を見守つて、貴君の生涯に要する祝福を送りなされるのである。毎日貴君の上に喜びと光りとを齎らす此等の嘉き物は、皆主から送られるのである、此等のものは確かにキリストの復活の證據が間違のない歴史的證據である事を語つて居る。聖パウロもさうだと云つて居る、多くの證人が彼を見た、イエスは眞に自分の生きて居ると云ふ確かな證據を與へ給うた。彼は其友と一所に食事をなし、彼等と共に語り其手や足に残つて居る釘のあとを彼等に示し、脅の槍傷を彼等に見せ給うた。主はその友の中で最も信仰の薄かつた者から、復活に關する疑團が残りにく消えて了うまで、四十日間地上に残り給うた、聖パウロは『今キリスト死より甦り給へり』と勝誇つて云つて居る。私共はかゝる歴史的證據を全然否定することは出来ない、併し更に確實な證據が各信者の經驗の内に見出される、私共は毎日、私共に他の

處からで無く、天國からのみ來り得る祝福に依つて、又誰でも無くキリストのみ獨り與へ給ふ祝福に依つて、イエスが猶天に生きて此世を支配して居給ふ事を知るのである。私共の罪の赦免、心にみつる平和、悲しき時に來る喜び、弱き時に來る助け、斯くの如き祝福を生む人と人との交、祈りの聞かる、事、攝理のめぐみ——キリストを措いて誰かこの様な天よりの嘉き物を私共に與へ得る人があらうか？ 此等は私共に取つてイエスが恵と榮光の地に生き且つ支配して居給ふと云ふ最もよい證據である。

ヤコブをエヂプトに連れて行くとして車が彼のもとに來た、私共を天の故郷に連れて行く車もやがて來るであらう、火の馬が曳いた火の車が、エリヤを天に連れて行くべく來た事がある、神の民を迎へに來る車は、人の眼に見える必要がない、——眼に見えない車——である、然もそれは實際に來るのである。ヨセフは穀物や葡萄酒のある國に住んで其所を支配し居るのに、ヤコブが大饑饉の

地カナンに残されて居る筈がない、果して宮殿からの車が、彼を迎へに来た。こゝにまた似た所がある、私共はイエスが天に於て生き且つ支配して居給ふ事を知つて居る。私共は跪いて祈り、さうして私共の贖主が生きて居て、私共の祈を聞き、私共を憶えて居て下さる事を知つて居るのである。

然し、これが總ては無い、これが最上のもではない、キリストは見えないけれども我等が黙想したり、又はハレルヤと叫んだりする時、必ず其處に在し給ふ事、主は常に生きて私共と交り給ふ事、主は地にある私共に天よりの嘉き物、即ち恵を下し給ふ事——これらは誠に尊い真理で、これだけでも私共の心魂に徹するほどの喜がある。然もまだ——よいものがある、私共はいつまでも主と離れて此地上に居るのでは無い、車が来て、ヤコブはほんの少し許りの嘉き物しかない饑饉の地から自分の子の居る國の首都へと真直に伴ひ行かれた、そして死んだと思つて居た然し實は生きて居た子と其國境で會ひ、最

も情に満ちた歓迎を受け、王の前にまで連れ行かれてこの國の最もよき所に住めよとの有難き命に接し、其後は其處に留つて、自分の子の傍近くに住み、彼に養はれていつたのである。最早其處の倉には澤山かゝるものゝあると云ふ印に遙か遠い國から送つて来た少しばかりの嘉き物を、口にするのではない、今はもう多くの倉と倉との中に在つて、自分の思ふまゝに何でも取る事の出来る身となつたのである。

此比喻は此世に於てキリストを信するものゝ例として、實に美しい真理である、地上に於ける私共の喜びはまことによいものであるが、其は私共が天よりの嘉き物を極く少し許り嘗め味つて居るのに過ぎない、やがて私共をキリストの御前に連れて行つて呉れる車が迎へに来るであらう、既に私共の友の内には其車が来て、生命と祝福の國に連れ行かれた者もある、其が謂ふ所の死である——神の御車は愛する聖者を故郷の家へ連れ歸るべく静かに動いて居る。ヤコ

ブは宮庭よりの車に乗つて彼方に連れて行かれる時、少しも悲しく思はなかつた、彼は己の今迄の仕事を棄て、悲しかつた所と別れて、彼の子の許に行きつゝあるのである、彼は飢と缺乏の地を去つて豊饒な地へ行きつゝあるのである、其がキリスト教信者が死に臨む時の有様である、私共は安かに休むために、此苦みと心配の場所を去つて行くのである、私共は涙と別離との國を去つて、先に逝きし愛するものの許に行くのである。

さこそへのあけぼのさなりなば、

世にてなごりをしくもわかれし、

こものかやく顔は、

笑みつゝ我を迎へん。

天からの車は既に私共の家をも訪れて、私共の家族の者を伴ひ去つた事があ

る、何日か其車が私共をも亦迎へに来て、私共は饑饉のある地、主の御顔の拜せられない此地から去つて行くのである。然しそれは若し私共が信仰に依つてキリストに属けるものとなつて居るならば、何も悲しい日ではあるまい、車は私共を主の住み給ふ榮光の地、萬物を支配し給ふ國に連れて行つて呉れるのである、主は其國の境に於て、必ずや私共に會つて下さるであらう。

陽かたむき、夕の鐘鳴りて、

夜は来れり、

我船出する時、

別れの悲しみ無からしめ給へ、

時と處の限界の外に、

潮は我らを連れ出さん、

かくて我、洲を過りし時、

水先案内者イエスさまかえまほし。

主は祝福の國の境で、私共^{わたくしども}に會つて下さるのである、主は優しい愛をもつて私共^{わたくしども}を迎へて下さつて父の御前に私共^{わたくしども}を伴うて下さるのである——天の使の前で、私共^{わたくしども}を彼の友とし、彼の兄弟とし、彼の姉妹として優待することを耻とし給はないのである、主は主の御側近く、天の榮光の真中に近き處に私共^{わたくしども}の住むべき場所を與へ給うて、天の最もよき物をもつて私共^{わたくしども}を養つて下さるのであらう、さうして私共^{わたくしども}は永久に何處にも行かないで其處に留まるであらう。

イエスキリストは私共^{わたくしども}の爲めに所を備へに先つて行き給うた、其の備が出来た時には、私共^{わたくしども}の許へ又來つて、御自分と共に私共^{わたくしども}を住はせるために、私共^{わたくしども}を引き取つて下さるのである、死は私共^{わたくしども}がパン屑を拾ふ所から、去つ

て大饗應の座に就くべく行く事に外ならない。

キリスト教信者の或る婦人が、今正に呼吸を引取らうとして居る時に、醫師は其室にある者は皆靜かにさせて置かなければならない事を話した、すると其婦人は、『私はこの室の中には騒動しい物は少しも見えませんが』と醫師に答へたと云ふ事である。『死は一層廣く且つ充實せる生命に入る事に外ならぬ』、私共はキリスト教信者の死のまことの光景を見度く思はないであらうか？

死は生命の冠なり、
死なかりせば貧しき者は益なく生きん、
死なかりせば生くるも生命ならず、
死なかりせば愚者も死を願うならぬ、
死は癒すために傷く、
我ら倒れ、我ら起き、我ら治む、

我等足楯より飛び去りて空に急ぐ、
然る其所の花咲くエデンの園は、
我眼には荒れて見たり、
死は我等に失へるエデンより多くを與ふ、
恐怖の王は平和の君なりき。

ヨセフの老年時代と死

信仰に由てヨセフは死んさする時に、イスラエルの子孫のエジプトより出づる事に就て語り、又そのが骸骨の事について命じたり。

——希伯來書第十一章第廿二節——

老——私共は實際老いつゝあるのであらうか？
私共が小山に登り行くのは、

清新な、人生の曉に近づくのだ、

私共は人生の幸福を得ようとして、

始めたばかりの子供である、

芽を出し、花を開く天國は私共の内にある、

私共は老いて益々若くなつて行くのだ。

——ルーシーラーコム——

創世記の記事は、或日ヨセフが其兄弟に次の如く語つたことを記して居る「我死ん、神かならず汝等を眷顧みなんちらを此地より出してそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひし地にいたらしめ給はんと、ヨセフ神かならず汝らをかへりみ給はん汝らわが骨をこゝよりたづさへのぼるべしといひてイスラエルの子孫を誓はしむ」

前章に於ける吾々の研究は、ヤコブの生涯の終りの所まで進んで来た、或日の事、彼の父が彼を見たいと云つて居ると云ふ報知がヨセフの許に來た、年長いた父はもはや自分の此世を去ることに就て考へてゐるのである。どうしてもエジプトの地で死ななければならぬと覺りながらも、この知らぬ土地に葬られる事は欲まなかつた、彼は約束の地で死にたいと思つてゐた、そこで彼は當時の野蠻な習慣に従つて、エジプトの地に彼を葬らない事をヨセフに誓はせたのである。

ヨセフは約束をした、父が「我に誓へ」と云つたので父に誓をたてた。此老人が死期の漸く近いた時に、自分はマクベラの洞穴の中に在る、自分の父と妻との側に眠らせてもらひたいと云つたのは、決して單なる感情からではない、神がカナンの地を汝の子孫に與へると申された、其約束に對する彼の強い信仰からである、彼は約束の必ず成就されることを信じて居たから、自分の骨を埋むる所は子供等の未來の家庭のある所にしたいと思つてゐた。そして彼の家族のものに、今は皆エジプトに住んでは居るが、エジプトの地は彼等の故郷では無いと云ふ觀念を常に持たせて置き度いと願つてゐた、若し自分の墓が約束の地にあるならば、子等の心を常に其處に引付けるであらうとも考へてゐた。

そこへ他の出來事が起つた、ヤコブは終に病氣に罹つた、ヨセフはそれを聞くと、直に二人の子供を連れて、父の枕邊へと急いだ。ヤコブは自分の子の中

にヨセフの二人の子を入れて同じく我子とし、彼等を抱きこれに接吻し、其瘡せ
た震へる手を延べて二人の子供の頭に置き、彼等に美しい祝福を與へたのであ
る、「わが父アブラハム、イサクの事へし神、わが生れて今日まで我をやしなひ
給ひし神、我をして諸の災禍を贖はしめたまひし天使、ねがはくは是童子
等を祝たまへ、ねがはくは是等のもの我名をもて稱へられんことを」。

次は彼の死の有様である、彼の子等は皆そこに集つた、死に行く族長は彼等
の未來を一人一人に就て豫言した、それは實に興味あるものであるけれど、吾
々は今爰に其に就て多くを云ふ暇を有たない、それよりもヨセフの爲めにした
祝福の言葉を考へて見たい。

ヨセフは實を結ぶ樹の芽の如し。

泉の傍にある實を結ぶ樹の芽の如し、
その枝途に垣をこゆ。

射者彼をなやまし、

彼を射、彼を悪めり、

然る彼の弓は猶勁くあり、

彼の手の臂は力あり、

是ヤコブの全能者の手によりてなり、

(其よりイスラエルの磐なる牧者出づ)

汝の父の神による彼汝を助けん、

全能者による彼なんぢを祝まん、

上なる天の福、

下に横はる淵の福、

乳哺の福、胎の福、汝に来るべし、

父の汝を祝することは、

わが父祖の祝したる所に勝りて

恒久の山の隈極にまで及ばん。

是等の祝福はヨセフの首に歸し、

其兄弟と別になりたる者の頭頂に歸すべし。

自分の愛敬する父の死の床の側に立つ時は、其人に取つて最も嚴肅な時である。父の最後の呼吸を見守り、別れの言葉、祝福の聲を聞く時に、人は自らの生涯の總ての出來事を、再び新しく思ひ出すのである、この時はヨセフに取つて最も嚴肅な時であつた、彼が父の床近く立つて、彼の頭上に死んで段々冷たくなつて行きつゝある手がのせられて居る事を思ふ時に、彼の總て盡した孝養はまだく足り無かつた様に思はれた。

遂に微かに話す聲が聞え無くなつた、祝福は皆致された、彼は死ぬ時に「エフロンの田にある洞穴にわが先祖等どもに我をはうむれ」と命じ、「其子に命ずる事を終へし時、足を床に斂めて氣たえて其民にくはるゝ」。死は實に

不思議なものである！ たつた今迄祝福や告別の言葉を口にして居つた人が、既う死んで地から離れて了つたのである。其心に満ちて居た優しい愛、一時間前には血色と温味とを以て其顔に活氣を與へて居つた愛が、此地土から去つて了つたのである、テニソンは歌つて曰く、

生命と思想、去り行けり、

並びて、

窓と戸を廣く開け放したるまゝ、

無頼着なる寓居人よ、彼等は！

室は皆夜の如く暗く、

窓にも燈火なし、

戸口には人の聲も聞えず、

前にはよくありしがど——

扉に近く、窓の戸近く、
或は窓を通して、
暗き人なき家の、
虚無と空虚を我等は見る。

ヨセフにも彼が父の床の側に侍つて、父の呼吸が止つたのを見た時には、其尊
い死骸がさう見えたのであつた、死の不思議なる神祕よ！ 父か母かが死んで
了うと、私共は後にたゞ淋しく頼りなく残される、私共は平常親の死を覺悟し
て居ないやうである。どんなに親が年を取つて居ても、どんなに其腰が曲つて
居つても、どんなに白髪が生へて居つても、既う親は死んでも可いと云ふ年は
決して來ない、親が死ぬる時にはどうしても悲しみますには居られない。親が死
んで了うと、私共の生活は變つて來る、或人は母が去つた後の家庭を次の如
く歌つた。

爐の火は跡々燃え、
眞餘のランプは明く照り、
この室に、過ぎし昔、
懐しの母よく座り居給ひき、
こは母の椅子なりき……
あゝ火もランプも、
靈の住む所には何かはせん、
此處は常に暗く瀾りて見ゆ、
母上の死給ひてしより。

棚の上の母の針箱――
母の小鳥もかしく呼べど――あゝ！
昔の日、この樂しき鳥は、
終日たゞ、さへすりてのみありしが、

今は噓かすなりて悲しげに洗めり、
羽根の中に首をかくして、
我ら其何故なるを知らず、
母上の死給ひてしより。

西の壁にかゝれる時計、

母の手よく其を巻きしが、

死せし人の物言はざる如く、

銀の鐘、音せずなりぬ、

其死骸の如き面の前に我がらみて、

廣く伸ばせる生なき針を見まもれど、

一度も我に時を打たず、

母上の死給ひてしより、

日來り、日去り——或時は早く或時は遅く——

そは雨降りしか、暗れをりしか？
そは日照りしか、雪ふりしか？
我知らず——母の空しき椅子こゝにあり、
母の側にて我ら樂しかりし時の、
今は影だにあらすなりぬ、
生活と愛はいたく變りし如く見ゆ、
母上の死給ひてしより。

いつでも父や母の死なれた時には其通りである、生活の有様は昔のそれと必ず變つて行く、最も尊い或ものが、私共の再び得る事の出来ない或ものが、私共の生活から無くなつたのである。母の祈りはもう聞く事は出来ない——私共が生れると其日から唱へて下さつて居た其祈りを、もう祈つて頂く事は出来ない、もう此世に於ては父の愛、注意、心配、希望を受くる事は出来ない——小供の

時から受けて居た其等をもう今は受ける事は出来ないのである。小供がまだ小さい内に、父か母か死ぬると云ふ事は、小供に寂寞の感を強く與へるものである、そして又其精神的損失も莫大なものである、然し苦しみはそんなでも無いかも知れぬ。ヨセフが死んだ父の顔の上に伏し、之を抱いて哭き、之に接吻したのは無理もない、彼はいたく悲み嘆き、心を甚だしく傷めたのである。

ヨセフは早速彼の愛が父の名と記憶とを崇める爲めに爲し得る凡ての事をし始めた。父の死骸に香油をぬつて、エヂプトの慣に従ひ、七十日喪に服した。そして父の遺命に依つて十二人の子等が、多くのエヂプトの友人と共に、その中には高貴の人も澤山あつたが、カナンの地に其柩を運んで先祖の者の側近くに葬つたのである。

それはヘブロン地のマクベラの洞穴の中であつた。此墓は今大きな回々教の禮拜堂で覆れて居つて、入口は回々教徒の外は誰も入る事の出来ない様に安

全に守られて居る。その禮拜堂の中には、一々社があつて、其下にアブラハム、サラ、イサク、リベカ、レア、ヤコブが眠つて居る、またこの神聖な會堂の内面に、小さな丸い入口があつて、其處から昔の洞穴に行ける様になつて居るが、ヤコブの十二人の子等が香油をぬつた父の死骸を横へたのは、そこに違ひない。この聖い墓地を回々教徒はいつまで封鎖して居る事が出来るか、多くの人は何時かはこの墓も開かれ探究されて、丁度最近エヂプト人の墓地で、モーセの時代のバロ王家の人々や、其他多くの有名な人の木乃伊が発見された様に、ヤコブの木乃伊も発見されるであらうと夢みて居る。

ヤコブの埋葬が済んでからのヨセフの話は、只一つだけしか傳へられて居ない。ヤコブが死ぬると、兄弟達はそろ／＼心配し始めた、今迄は父が居つたお蔭でヨセフは自分達が彼に犯した罪の報をし得ないで居つたのである、今父が死んで其を止める人が無いから、ヨセフは自分達を罰して酷い目に遭はすに違ひ